

福岡市

四箇遺跡

—重留老人福祉センター建設に伴う埋蔵文化財の調査—

(四箇遺跡群第22次調査)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第199集



1989

福岡市教育委員会

第199集正誤表（四箇遺跡群第22次調査）

頁	行	誤	正
3		8-第190集	8-第196集
18		Fig.10 00172	Fig.10 01172
22	2	搔器 00634	搔器 00631
29	7	01090	一つを抹消
	19	01059	01079
50	21	01005	01005
		Fig.31 8-(地上)	Fig.31 8-(地山)
56		Fig.37 01058	01168
57	3	01117	01177
58	32	01534	01416
PL.292	列目左側	01410	01414

No.1678/

四箇遺跡

—重留老人福祉センター建設に伴う埋蔵文化財の調査—

(四箇遺跡群第22次調査)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第199集



遺跡調査番号：8723

遺跡略号：SIK

1989

福岡市教育委員会



木製腕輪 (SD-16溝出土)

序 文

福岡市西郊に位置する早良平野は古来より先人の多く居住するところであり、彼等の残した数多くの遺跡は近來の開発に伴う発掘調査によってその内容が次第に明らかとなり、衆寡注目する地域となっています。

さて福岡市では人口増加にともなう福祉施策事業として今回この四箇遺跡群地内に老人福祉センターを建設することになりました。工事によって消滅する当該地内の文化財については発掘調査による記録保存を実施し、縄文時代中期・弥生時代前期の生活遺構を検出するなど多人な成果をあげました。

本書はこの調査成果を収録したものです。就きましては本書が市域の文化財に対する認識と御理解の一助となれば幸甚に存じます。

平成元年3月31日

福岡市教育委員会

教 育 長 佐 藤 善 郎

例 言

□本報告書は1989年7月～11月に発掘調査を実施した早良区重留老人福祉センター建設に伴う四箇遺跡群第22次調査の発掘調査報告書である。

□遺構の実測は、横山邦経、宮井善朗を中心に行い、他に大橋隆司、尹 煥両氏の協力を得た。なお遺構は溝→SD、土壇→SKと記号化し、これに番号を付して呼称とした。

□遺物の実測は、横山、大橋、高橋健治（別府大学）によった。なお掲載遺物には木器・木材を除き番号登録（5けた）を行ったが、出土状況図番号との対照は以下の如くである。

100-141	→	00001-00079	270	→	00242	900	→	00551
143-199	→	00080-00142	272	→	00243	901-911	→	00553-00560
116	→	00145-00148	274	→	00245	913-921	→	00568-00577
117	→	00149	276	→	00247	922-931	→	00578-00588
200	→	00161	277	→	00248	R1000	→	00601
202-208	→	00163-00170	280-294	→	00250-00268	1100-1106	→	00611-00619
210	→	00172	296-299	→	00269-00272	1300	→	00631
212-219	→	00174-00181	347	→	00275	1301	→	00632
221	→	00182	262	→	00276	1303	→	00634-00635
223-229	→	00185-00191	271	→	00277	1400-1405	→	00651-00659
230	→	00193	295	→	00279	R1500-R1506	→	00671-00677
246	→	00215	300-222	→	00291-00317	1500	→	00691
247-249	→	00217-00220	400-433	→	00331-00367			00143
251	→	00222	600-673	→	00391-00475			00144
252	→	00223	656-667	→	00476-00485			00273
254	→	00225	674-683	→	00486-00495			00274
256	→	00227-00228	709	→	00501			00503-00505
258-260	→	00230-00233	732	→	00502			00721-00730
263-266	→	00235-00238	800	→	00511			00750
309	→	00241	802-828	→	00512-00543			

□遺物のうち木器・木材の樹種同定にあたっては九州大学農学部木材理学教室の堤壽一先生、小田一幸先生には多大な御協力を戴いた。また本課井沢洋一、汐崎美紀、吉田扶希子氏にも非常な協力を得た。記して感謝する次第である。

□本書の編集・執筆は横山が行った。

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査組織	1
3. 四箇遺跡群におけるこれまでの調査	2
II. 遺跡の立地と環境	5
III. 調査の記録	9
1. 縄文時代の調査	12
① SK 01土壙	12
② SK 02土壙	12
③ SK 03土壙	12
2. 弥生時代の調査	23
① SD 01溝	23
② SD 04溝	23
③ SD 05溝	23
④ SD 16溝	25
⑤ SD 16b 溝	43
3. 古墳時代の調査	45
SD 10溝	45
4. 歴史時代の調査	50
① SD 19溝	50
② SD 02溝	50
③ SD 08溝	51
④ SD 03・06・07・09・11~15・17溝	51
⑤ SK 04土壙	54
⑥ SK 06土壙	54
⑦ SK 05土壙	54
5. 調査区出土の遺物	56
IV. おわりに	58

図 版 目 次

- PL. 1 1. 早良平野奥部を望む（調査区北側より）
2. 調査区全景（北東より）
- PL. 2 1. 調査区南側遺構検出状況（北より）
2. 調査区南東側水田址検出状況（北より）
- PL. 3 1. 調査区西端部遺構検出状況（北より）
2. SD 10溝検出状況（北より）
- PL. 4 1. SD 10溝北半部杭列検出状況（南より）
2. SD 10 溝北半部杭列検出状況（西より）
3. SD 10溝東岸杭列出土状況（西より）
- PL. 5 1. 調査区南壁土層断面（北より）
2. SD 16溝南端部土層断面（北より）
3. SD 16b 溝南端部土層断面（北より）
- PL. 6 1. SD 10溝北壁土層断面（南より）
2. SD 10溝南壁土層断面（北より）
3. SD 10溝土層断面（北より）
- PL. 7 1. 調査区西端部南壁土層断面（北より）
- PL. 8 1. SD 16溝検出状況全景（北より）
2. SD 16溝検出状況全景（東より）
- PL. 9 1. SD 16溝検出作業状況（北より）
2. SD 16溝西岸矢板列検出状況（東より）
- PL. 10 1. SD 16溝溝内杭列出土状況（南より）
2. SD 16溝溝内杭列出土状況（北より）
- PL. 11 1. SD 16溝溝内流木出土状況（南より）
2. SD 16溝西岸三叉鉋出土状況（南より）
3. SD 19溝付近杭列検出状況（南より）
- PL. 12 1. SD 16b 溝検出状況（南より）
2. SD 16b 溝検出状況（北より）
3. SD 16b 溝検出状況（東より）
- PL. 13 1. SK 05土壌完掘状況（東より）
2. SK 05土壌東壁土層断面（東より）

- PL. 14 1. 縄文式土器出土状況 (南より)
2. 縄文式土器出土状況 (南より)
3. 縄文式土器出土状況 (南より)
4. 縄文式土器出土状況 (南より)
5. 縄文式土器出土状況 (南より)
- PL. 15 出土縄文式土器(1)
- PL. 16 出土縄文式土器(2)
- PL. 17 出土縄文式土器(3)
- PL. 18 出土縄文式土器(4)
- PL. 19 出土縄文式土器(5)
- PL. 20 出土縄文式土器(6)
- PL. 21 出土縄文式土器(7)
- PL. 22 SD 16溝出土弥生式土器(1)
- PL. 23 SD 16溝出土弥生式土器(2)
- PL. 24 SD 16溝出土弥生式土器(3)
- PL. 25 出土各種石器類
- PL. 26 出土各種木器類

插图目次

Fig. 1	四箇遺跡群位置図 (1/25,000)	7
Fig. 2	第22次調査地点図 (1/1000)	10
Fig. 3	第22次調査区遺構全体図 (1/150)	(折込み)
Fig. 4	調査区土層断面図 (1/60)	(折込み)
Fig. 5	SK 01土壌出土状況実測図 (1/30)	13
Fig. 6	SK 02土壌出土状況実測図 (1/30)	13
Fig. 7	SK 03土壌出土状況実測図 (1/30)	14
Fig. 8	縄文時代出土遺物実測図(1) (1/3)	15
Fig. 9	縄文時代出土遺物実測図(2) (1/3)	17
Fig. 10	縄文時代出土遺物実測図(3) (1/3)	18
Fig. 11	縄文時代出土遺物実測図(4) (1/3)	19
Fig. 12	縄文時代出土遺物実測図(5) (1/1)	20
Fig. 13	縄文時代出土遺物実測図(6) (3/4)	21
Fig. 14	縄文時代出土遺物実測図(7) (3/4)	22
Fig. 15	SD 01・04・05溝出土遺物実測図 (1/3)	24
Fig. 16	SD 16溝施設横断面実測図 (1/40)	25
Fig. 17	SD 16-16b 溝出土状況実測図 (1/150)	(折込み)
Fig. 18	SD 16溝出土遺物実測図(1) (1/3)	27
Fig. 19	SD 16溝出土遺物実測図(2) (1/3)	28
Fig. 20	SD 16溝出土遺物実測図(3) (1/3)	30
Fig. 21	SD 16溝出土遺物実測図(4) (1/3)	31
Fig. 22	SD 16溝出土遺物実測図(5) (1/2)	32
Fig. 23	SD 16溝出土遺物実測図(6) (1/4)	33
Fig. 24	SD 16b 溝施設縦横断面実測図 (1/40)	43
Fig. 25	SD 16b 溝施設・流木出土状況実測図 (1/40)	44
Fig. 26	SD 10溝施設縦横断面実測図 (1/40)	45
Fig. 27	SD 10溝施設・流木出土状況実測図 (1/40)	(折込み)
Fig. 28	SD 10溝出土遺物実測図(1) (1/3)	47
Fig. 29	SD 10溝出土遺物実測図(2) (1/4)	47
Fig. 30	SD 19溝施設出土状況平面実測図 (1/40)	50

Fig. 31	SD 02溝土層断面実測図(1) (1/40)	50
Fig. 32	SD 02溝土層断面実測図(2) (1/40)	51
Fig. 33	SD 02・08・17溝出土遺物実測図 (1/3)	52
Fig. 34	SK 04土壌出土状況実測図 (1/30)	54
Fig. 35	SK 06土壌出土状況実測図 (1/30)	54
Fig. 36	SK 05土壌出土状況実測図 (1/30)	55
Fig. 37	SK 05土壌出土遺物実測図 (1/3)	56
Fig. 38	調査区出土遺物実測図 (1/3)	57

付 図 目 次

- 付図1 四箇遺跡群調査地点図 (1/4000)
付図2 縄文時代調査区全体図 (1/100)
付図3 SD16溝施設・流木出土状況実測図 (1/40)

表 目 次

Tab. 1	四箇遺跡群におけるこれまでの調査	4
Tab. 2	SD16溝出土木材鑑察表	34
Tab. 3	SD10溝出土木材鑑察表	48
Tab. 4	SD19溝出土木材鑑察表	53

I はじめに

1 調査に至る経過

1986年福岡市民生局福祉課より早良区大字重留字満所1068-4番外に重留老人福祉センター建設の事業計画が教育委員会埋蔵文化財課に提出された。

同課では当該地内の埋蔵文化財の有無について埋蔵文化財課に試掘調査を依頼するとともに事業遂行についての可否を成果によって協議することとした。

試掘調査は東西方向にひろがる当該地(3300㎡)に対し南北方向に平行する3本のトレンチとやや北偏りの位置にこれらと直交する東西トレンチ1本を設けて遺構・遺物の検出にあたった。(Fig. 2)

試掘調査の結果主として南北方向の各トレンチで水田址、旧河川など戦国期および弥生時代の遺構の埋没が確認され、遺構の分布状況から生活に直接関連するものは薄いと判断されたのである。

埋蔵文化財課と当該課では老人福祉センター建設に伴って消滅するこれら遺構群の保存について協議を重ねたが、遺構の遺存位置が浅く、全体的に工事による影響をおおむる点が明らかとなったため対象地全域の本調査を実施し、記録保存を行なうこととなった。

なお当該地は調査前旧田面に花崗岩パイラン土の盛土がなされていたが、以前の水田経営時は反当収量1俵(600kg)をあげる上々田であったとのことである。

調査は前記の盛土除去を昭和62年8月5日より開始し、これの完了後旧水田耕土の剥取りに至った。

耕作土は東より西に傾斜する現況を反映して若干西側で厚く、土量の膨大なため調査区東半をまず調査し、次いで西半部を行った。

遺跡調査番号	8723		遺跡略号	SJK-22	
調査地 地籍	早良区大字重留字満所1068-4他		分布地図番号	西部184	
開発面積	3,300㎡	調査対象面積	3,300㎡	調査面積	3,000㎡
調査期間	1987(昭和62)年7月31日～11月27日		事前審査番号	59-35	

2 調査の組織

四箇遺跡群第22次調査としておこなった重留老人福祉センター建設に伴う調査は、本市民生局福祉課の補助事業として行ったものである。この調査にあたっての組織は以下の通りである。

調査委託:福岡市民生局福祉課老人福祉係

I はじめに

調査主体：福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課第1係

調査総括：埋蔵文化財課長 柳田純孝 埋蔵文化財課第1係長 折尾 学

調査庶務：岸田 隆 元村久美子

調査担当：宮井善朗 横山邦継

調査補助：尹 換（九州大学考古学研究室）

整理補助：大橋隆司 長家 伸（九州大学考古学研究室）

整理作業：小森佐和子 土斐崎つや子 尾崎育子 安野良 松尾絹代 溝口博子 吉田扶希子
沙崎美紀

発掘作業：広瀬 梓 高田 茂 大岡弘明 大鶴浩 松尾和浩 尾崎利一 因ヨシ子 小柳
和子 青柳弘子 倉光アヤ子 倉光京子 倉光千鶴子 倉光信子 斉藤国子 富永
ミツ子 井上ムツ子 井上清子 井上トミ子 井上磨智子 井上ヒデ子 横溝チエ
子 横溝忠美子 横溝カヨ子 柳浦八重子 清末しずえ 結城千代子 富崎フミ子
宮崎栄子 佐藤みづほ 徳永ますみ 西山秀子 永井鈴子

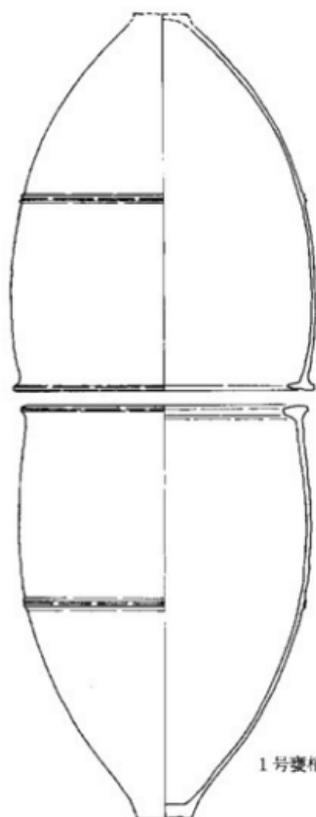
3 四箇遺跡群とこれまでの調査

早良平野を北流する寒見川右岸に位置する四箇遺跡群に最初に考古学的調査がなされたのは1975年（昭和50年）2月に始まった日本住宅公団による共同住宅建設に伴うものである。

この公団住宅建設に伴う調査はこれより1976年9月におよび、この間D・A・E・B・C地点と地点を移して調査が継続された。調査は総面積17615㎡に相当し、これらの成果からA～B地点にかけては微高地（第1微高地）がみられ縄文時代前期・後期、弥生時代の遺構がひろがり、更にこれの南側に隣接して微高地（第2微高地）がある。第1微高地より第2微高地にかけての低地部は水路が確認され、C地点へと流入している。水路部では他に杭列や水田畦畔が検出されている。またこれに伴って多くの建築材や杵・三叉鍬・えぶりなどの農具、弓、手斧柄などの武器・工具などの木製遺物が出土した。更にD地点は古墳時代建築材が多量に出土した。次でE地点では弥生時代と考えられる水田畦畔が認められた。以上の様に公団住宅建設に伴うA～E地点の調査では本遺跡がこれまで市域では殆どみられなかった縄文時代前期～後・晩期の低湿地遺跡であり、更に弥生～古墳時代に継続することが明らかとなったのと周辺部の増加する住宅化による周辺地域の遺跡の消滅に抗するために1976年（昭和51年）より主として個人専用住宅の新築に先立つ調査を国庫補助事業として始めた。

この「四箇周辺遺跡調査」は調査の開始された1976年より1980年の5年間で試掘調査を含めて34地点となる。従ってこれ以降の調査回数については整理したものが多い。

またこれまでの調査成果によって縄文時代前期～古墳時代に亘る各時代の生活ステージ、自然的環境の復元について遺跡群内で検討できる素材は揃っているものと思われる。



ボタン状上製品

J-104 地点 (雙椀と銅輝土製品)

1号塚

—参考文献—

①	「四箇周辺遺跡調査報告書」(1)	【福岡市埋蔵文化財調査報告書第42集】	1977年	福岡市教育委員会
②	「 〃 〃 」(2)	「 〃 〃 」	第47集】	1978年 福岡市教育委員会
③	「 〃 〃 」(3)	「 〃 〃 」	第51集】	1980年 福岡市教育委員会
④	「 〃 〃 」(4)	「 〃 〃 」	第63集】	1981年 福岡市教育委員会
⑤	「 〃 〃 」(5)	「 〃 〃 」	第100集】	1983年 福岡市教育委員会
⑥	「四箇遺跡」	「 〃 〃 」	第172集】	1987年 福岡市教育委員会
⑦	「四箇遺跡」	「 〃 〃 」	第199集】	1989年 福岡市教育委員会
⑧	「四箇遺跡」	「 〃 〃 」	第190集】	1989年 福岡市教育委員会

I はじめに

Tab. 1 四箇道跡群におけるこれまでの調査

次数	調査番号	調査原因	地区・地点	調査地	調査面積	調査期間	調査担当者	報告書
1	7411	共同住宅	D地点	早良区西箇	1,155㎡	750220～750630	二宮 忠司 梅田 純孝	⑥
2	7516	公団住宅	A地点	早良区西箇	1,270㎡	75071～7501225		
3	7517	公団住宅	E地点	早良区西箇	2,250㎡	751220～760325	〃	〃
4	7518	公団住宅	B地点	早良区西箇	4,765㎡	760115～760500	〃	〃
5	7614	専用住宅	J-10 a 地点	早良区西箇451-3外	1,148㎡	760405～760530	〃	②
6	7615	共同住宅	C地点	早良区西箇451-3外	8,175㎡	760406～760930	二宮 忠司 梅田 純孝	⑥
7	7706	専用住宅	J-12 a 地点	早良区西箇517-3・4	45㎡	770823～770901	〃	②
8	7707	専用住宅	J-11 a 地点	早良区西箇505-3	36㎡	770823～770910	〃	②
9	7708	専用住宅	J-10 b 地点	早良区西箇505-5	30㎡	770823～770901	〃	②
10	7709	専用住宅	J-10 i 地点	早良区西箇505-2・8	450㎡	771118～780119	〃	②
11	7727	専用住宅	J-11 a -2地点	早良区西箇505-2・8	80㎡	780200～780300	〃	②
12	7813	病院	K-10 a 地点	早良区西箇501-16	252㎡	780529～780705	〃	
13	7814	専用住宅	J-10 j 地点	早良区西箇503-4	242㎡	780600～780600	〃	
14	7815	専用住宅	K-11 a 地点	早良区西箇491	145㎡	780600～780600	〃	
15	7816	農地改良	K-11 b 地点	早良区西箇493-1	250㎡	780601～780600	〃	
16	7817	専用住宅	J-10 k 地点	早良区西箇505-2	145㎡	780601～780600	〃	④
17	7911	専用住宅	J-10 i 地点	早良区西箇505-2	540㎡	790305～790430	〃	④
18	8015	専用住宅	J-11 d 地点	早良区西箇505-2	117㎡	800580～800615	〃	
19	8219	専用住宅	L-11 c 地点	早良区西箇427	450㎡	820615～820806	〃	⑤
20								
21								
22	8723	公共施設		早良区西箇大字新字桑原1062-1棟	3,300㎡	870731～871130	横山 野 歷 山井 豊 朗	⑦
23	8744	公園		早良区西箇大字新字桑原1066-4棟	1,900㎡	871130～880331	松岡 村 逸 占 武 博 学	⑧

II 遺跡の立地と環境

四箇遺跡群は、福岡市の西郊早良平野に位置し、平野を北流する室見川中流域右岸の沖積微高地（海拔22m前後）上に展開する。（Fig. 1）

本遺跡群はその規模が東西800m、南北500m程であり、東半部には南北方向に幅広い自然流路（埋没河川）が走り、東西に大きく遺跡群を分けている。

遺跡群東・南方向のより高海拔の平野部には四箇八郎丸・四箇大町・四箇東・重留の各遺跡群が隣接するが、これら各遺跡群の内容解明とともに「遺跡群」の把握についても更なる考慮が必要となってきた。

ところで1975年（昭和50年）2月に始まる四箇遺跡群調査は縄文時代～古墳時代に亘る遺構とともに豊富な遺物量の出土があり、特に縄文時代後期「特殊泥炭層」では通常的生活利器に加えて、獣骨・木器・木製品等の有機遺物を伴出したことはそれまでの丘陵部に限られた調査対象に画期的変化を与えることとなった。

本遺跡群ではこれを契機として群内の個人住宅建替えなどの小規模開発を対象とした四箇周辺遺跡調査が現在まで継続的に行われて来ており、多大な成果をあげつつある。

ここで第22次調査で明らかとなった縄文時代中期包含層との関連から本遺跡群内における縄文時代遺構・遺物を検出した各地点に触れ、次で早良平野における縄文時代主要遺跡を列挙し本調査成果の一助としたい。

1. 四箇遺跡群 (Fig. 1-1)

a. A地点

(G1)

1975年7～12月調査によって縄文時代後期埋藏・包含層が検出され、西平式・三方田式土器とともに多数の石器類が共伴した。特に試掘調査のみにとどめた保存区には長径60m、短径12m程の三日月形をした特殊な泥炭層が認められ、ヒュータン、マメなどの栽培植物の他に多くの雑草種子などが分析成果で出ている。

b. B地点

(G2)

縄文時代前期包含層調査で管壺式、壺式土器とこれに伴う石器類を多く出土し、管壺式土器が量的に多いとされる。

c. J-10a地点

(G3)

1976年4月～5月調査で杭列遺構に伴って縄文時代後・晩期（三方田式・夜白式）遺物が検出されている。

d. J-10h・11a・12a地点

(G4)

1977年8～9月に亘る調査で縄文時代後期土器などが出土した。

II 遺跡の立地と環境

e. J-10k 地点

(註5)

1978年6月調査により自然流路堆積から縄文時代後期遺物が少量出土した。

f. J-10l 地点

(註6)

1980年3-4月調査で縄文時代前期の竝式土器、管型土器の包含層、および同時期の円形竪穴(3基)および後期後半期の円形竪穴(5基)などを検出した。

四箇遺跡群ではこの他に数地点縄文時代遺構、遺物を出土するものがある。

2. 入部地区圃場整備事業に伴う調査(第1次) (Fig. 1-2)

1987年の調査では四箇遺跡群・四箇東遺跡群にまたがる地域で縄文時代後期後半-末期の貯蔵穴、竪穴住居址、旧河川などが検出された。このうち竪穴住居址は径3m程の円形小型のもので、中央に甕を埋置した炉を切り、同時期の生活土器とともに土製紡錘車や尖頭蛤刃石斧、打製石器類、敲打器などの石製利器がほぼこの時期の遺物全組成を示す程度に出土している。

3. 吉武遺跡群 (Fig. 1-3)

(註7)

飯盛・吉武地区圃場整備事業に伴う第2次調査(1982年)で縄文時代後期初頭の貯蔵穴群(20基)が検出された。また続く第3次調査(1983年)では2次調査と同様に扇状地末端に近い斜面で遺構をともなわない縄文時代中期(阿高式)の土器類が出土した。

4. 羽根戸遺跡 (Fig. 1-4)

(註8)

標高23-27mの中位扇状地にする遺跡である。

1984年5月-9月にかけて市立空岬ヶ丘中学校建設に伴う調査で土壌その他より縄文時代晩期土器および石核・使用痕のある剥片など同時期の遺物が出土した。

検出した土壌は復原形で長さ90cm、幅70cm、深さ20cmを測り、この中より晩期組織粘土器が出土した。(羽根戸原C遺跡)

また1985年7月-1986年6月にかけて調査を行った羽根戸古墳群N群第7号墳丘部とこの周辺において燃糸文土器・楕円押型文土器、打製石鎌などが出土している。

この羽根戸遺跡を含む飯盛山北麓一帯は押型文土器や石鎌・スクレイパーなどの表面採集品が多く、同時期の小集落が多く点在するものと考えられる。

5. 広石遺跡 (Fig. 1-5)

(註9)

大規模民間宅地造成にともなって1987年9月-1988年9月にかけて調査がなされた。

遺跡は標高35m程で南面する丘陵緩傾斜部に不定形土壌数10基が検出された。遺構内外より押型文土器(山形・楕円)、燃糸文土器、条痕文土器が出土し、他に打製石鎌多数、柳葉形尖頭器などがみられる。(広石遺跡群C区)

6. 笠間谷遺跡 (Fig. 1-6)

(註10)

広石遺跡群北側に隣接し、標高80mをはかる狹隘な谷部の兩岸に位置し、数基の不定形土壌とともに押型文土器、燃糸文土器、条痕文土器とともにサスカイト製柳葉形尖頭器、打製石鎌

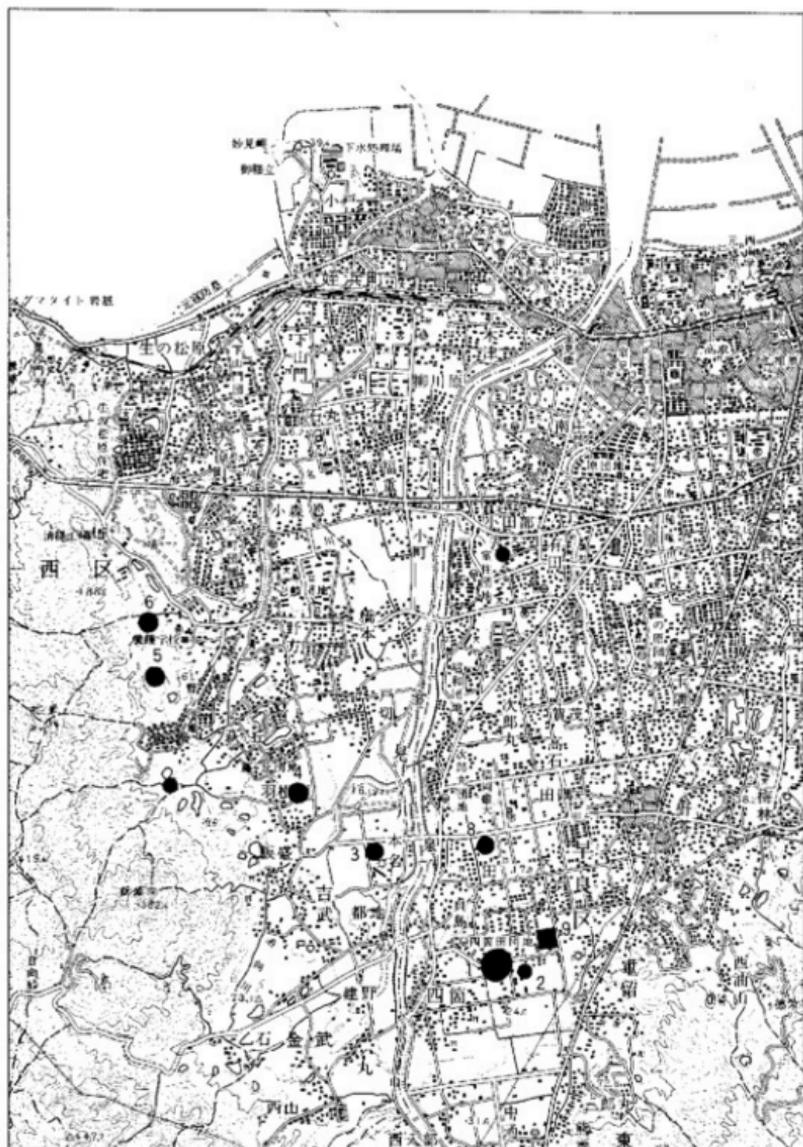


Fig. 1 四箇遺跡群位置図 (1/25,000)

- | | |
|------------------|----------------|
| 1. 四箇遺跡群 | 6. 笠間谷遺跡 |
| 2. 人部岡岡整備事業第1次調査 | 7. 有田遺跡 |
| 3. 西武遺跡群 | 8. 田村遺跡 |
| 4. 前根戸遺跡 | 9. 四箇遺跡群第22次調査 |
| 5. 広石遺跡 | |

II 遺跡の立地と環境

が出土した。また他にナイフ形石器、細石核などの先土器時代遺物もみられる。

7. 有田遺跡 (Fig. 1-7)

有田丘陵の西側端部(標高12m)に位置する第5次調査(1977年6月~11月調査)において縄文時代中~後期の貯蔵穴60基他が検出された。

これらの貯蔵穴は径50~140cm、深さ20~170cmと規模的には変修の大きいものであり、平面プランは円形~楕円形をなす。また貯蔵穴埋土断面に柱痕跡がみとめられるものが多く、規則性をもつ点で何らかの意図的配置の結果であると理解されている。

8. 田村遺跡 (Fig. 1-8)

1982年田村小学校建設に伴って調査が行われ、縄文時代前期後半、中期中葉土器・石器類、晩期埋蔵遺構などが検出された。特に前期後半、中期中葉の土器類は殆ど瀬戸内系土器の様相を示す。

以上の様に縄文時代遺跡はこの早良平野においても規模的に小さいものが点在するにすぎないといえる。

註)

註1. 「四箇遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第172集』1987年、福岡市教育委員会

註2. 註1に同じ

註3. 「四箇周辺遺跡調査報告書」(1)『福岡市埋蔵文化財調査報告書第43集』1977年、福岡市教育委員会

註4. 註3に同じ

註5. 「四箇周辺遺跡調査報告書」(2)『福岡市埋蔵文化財調査報告書第47集』1978年、福岡市教育委員会

註6. 「四箇周辺遺跡調査報告書」(4)『福岡市埋蔵文化財調査報告書第63集』1981年、福岡市教育委員会

註7. 「吉武遺跡群-市道野方全武線建設に伴う埋蔵文化財の調査」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第187集』1988年、福岡市教育委員会ほか

註8. 「羽根戸遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第134集』1986年、福岡市教育委員会

「羽根戸遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第180集』1988年、福岡市教育委員会

註9・10 本課下村智、加藤良彦両氏の御教示による。

註11. 「有田・小田部」第6集『福岡市埋蔵文化財調査報告書第113集』1985年、福岡市教育委員会

註12. 調査担当者浜石哲也氏の御教示による。

Ⅲ 調査の記録

概要 四箇遺跡群第22次調査地点は、遺跡群の北東側端部に近い部分にあたりこれまでの空白部を埋める地域である。

調査区は標高22.5m程度を測り、調査前は非常な良田であった。

第22次調査地点は1986年に本市民生局福祉課による老人福祉センター建設の計画が出され、事前に埋蔵文化財の有無の確認が必要となったため同年埋蔵文化財課による試掘がおこなわれた。

試掘調査は、東西に長い対象地(3300㎡)に南北に3本、東西にこれに直交して1本のトレンチを設けた。試掘では東西トレンチの西端部で幅広の溝状遺構が確認され、また東端部の南北トレンチでは小ピット群が確認された。この後本調査について当該課との協議を行い、1987年7月31日より本調査を開始した。

本調査は調査区東半部から重機による遺構検出を始めた。本調査区では現代耕作土・床土を除去すると人および大型偶蹄類(牛)の足跡が多数見出されたため特に顕著な部分600㎡程を調査した。水田は明確な区画を知り得ないが出土した少量の土器のうち土師皿から少なくとも室町時代以前には遡らない時期のものと考えられる。

他の主要な遺構は、溝遺構19条、土塋5基などである。溝遺構は全て不整形な形状であり、殆どが自然的営力によって流れたものと考えられる。

溝遺構のうち最も古いものは弥生時代前期後半代のもの1条(SD 16・SD 16b溝)、次で弥生時代中期初頭3条(SD 01・04・05溝)、また古墳時代後期末1条(SD 10溝)、平安～鎌倉時代3条(SD 02・08・17溝)、他に明確な時期決定資料を伴出しない時期不詳の溝11条(SD 03・06・07・09・11～15・18・19)が検出された。

土塋は明確なものが5基検出された。このうちSK 01～03土塋は調査区南端部西側を中心とする部分に縄文時代中期包含層(淡黄褐色微砂質土)が遺存し、これと同時期の所産と考えられる。

またSK 04土塋は時期不詳ながら、SK 05土塋は底面に4ヶ所井筒を支えた角柱痕を残す点で井戸と考えて良く、緑軸皿などから平安時代の所産と考えられる。

第22次調査地点に続く北側に、1987年11月より調査された第23次調査地点(公園建設)がある。

第23次調査地点では、第22次地点より続くSD 10溝相当溝(古墳時代後期末)の延長が直線的であることが確認された。また弥生時代前期後半SD 16溝は大きく西側に蛇行し、更に北側に蛇行して調査区北西隅方向に流れ去るが、途中中央部の東西方向に水利施設(しがらみ)を

II 調査の記録

右する。他に東岸には2条の不整な小溝（東西溝）があり、同時期と考えられている。

更に調査区南端部の前期溝の水利施設と重複してこれより新しい時期の水利施設をとまなう溝（旧河川）があり、自然流路の利用が永年に亘って行われたことが分かる。

第22次調査区の遺構出土遺物は、弥生時代前期後半 SD 16・16b 溝では SD 16溝より多く出土し、縄文晩期夜白式～弥生時代前期末までの土器類、大型蛤刃石斧、扁平片刃石斧、石庵丁細片がある。また三叉鉄、槽、木製丹塗り腕輪なども出土している。

古墳時代後期末 SD 10溝では同期の須恵器坏身、手捏ね土器および抉りのある木製品、柄状形を有する板材、木製有孔円盤などが出土している。

また SK 01～03土壌を中心とする縄文時代包含層では縄文時代中期初頭（鷹尚式）土器を主として一部に晩期土器を混じる。それから中期土器に共伴する石器類は黒曜石製石鏃を主とし



Fig. 2 第22次調査地点図 (1/1000)



Fig. 3 第22次調査区遺構全体図 (1/150)

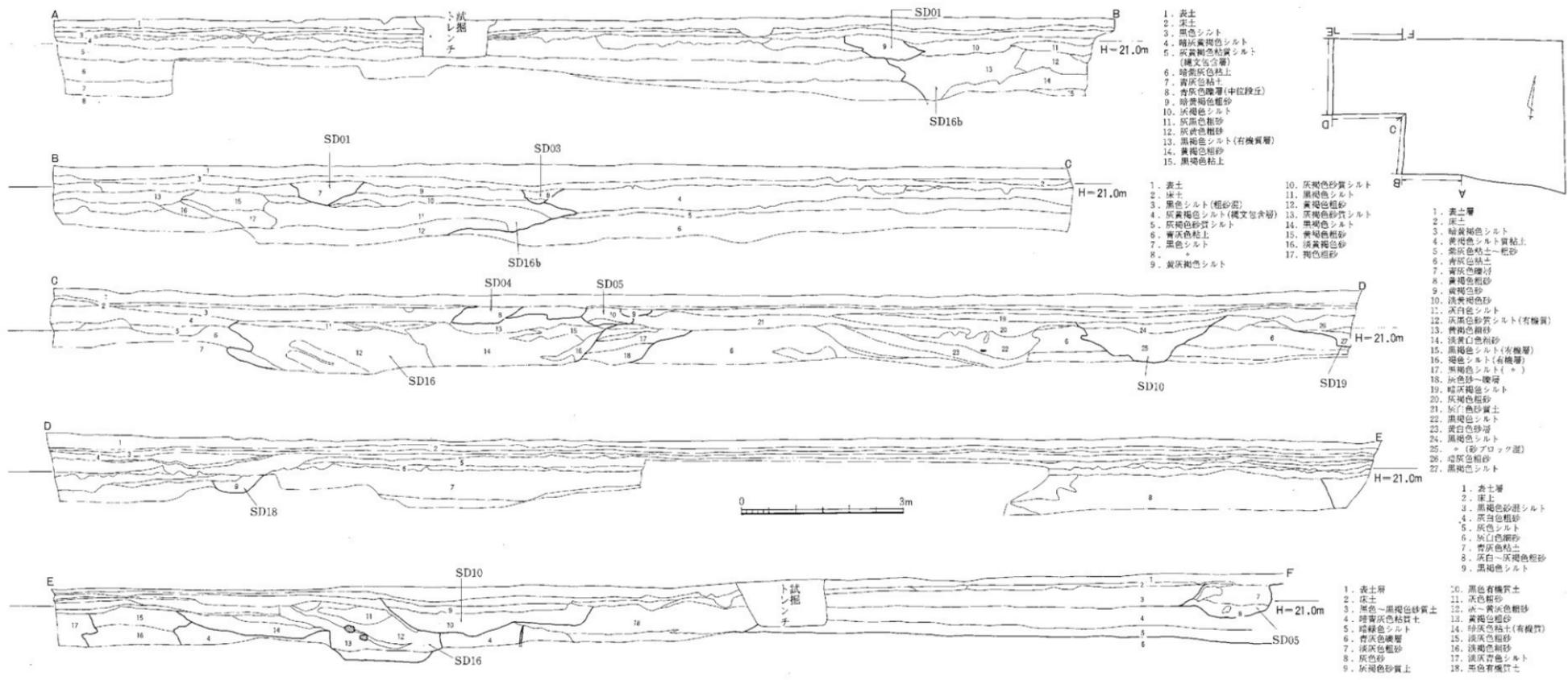


Fig. 4 調査区土層断面図 (1/60)

て他にサヌカイト製スクレイパー類、磨石などがある。

次に調査区の各壁面の基本的層序を概観することとする。(Fig. 4)

調査区南壁 (A-B) では第1層—表土、第2層—床土、第3層—黒色シルト—黒色砂質土、第4層—暗灰黄褐色シルト (縄文時代包含層)、第5層—灰黄褐色シルト、第6層—暗紫灰色粘土、第7層—青灰色粘土、第8層—青灰色礫層 (中位段丘、上面標高約20m) となる。

縄文包含層である第4層は層厚10~30cmであり、西側に従って厚くなる。西端部では第3層下面より切込むSD 01溝および第5層上より切込むSD 16b溝が見られる。

調査区西壁 (B-C) では第1層—表土、第2層—床土、第3層—黒色シルト (粗砂混)、第4層—黄褐色—灰黄褐色シルト (縄文時代包含層)、第5層—灰褐色砂質シルト、第6層—暗青色粗砂、第7層—青灰色粘土となっている。SD 01・03溝上端面は第3層下面にあたる。また南端部にはSD 16b溝の堆積がみられる。

調査区西側南壁 (C-D) では基本的層序は東端部に3m強残るのみであり、他は殆ど河川 (溝遺構) の氾濫による堆積で占められている。

第1層—表土層、第2層—床土、第3層—暗黄褐色シルト、第4層—黄褐色シルト質粘土、第5層—紫灰色粘土—粗砂、第6層—青灰色粘土、第7層—青灰色礫層となっている。中央部のSD 16溝とSD 10溝に挟まれた部分には第6層が遺存している (標高21.1m)。

調査区西壁 (D-E) ではC-D面での第6層 (青灰色粘質土) に相当するのが第7層となり、これ以上は様相の変わったものであり、氾濫による土層形成が顕著と考えられる。

第1層—表土、第2層—床土、第3層—黒褐色砂混シルト、第4層—暗灰色粗砂、第5層—灰色シルト、第6層—灰白色細砂、第7層—青灰色粘土 (標高21m)、第8層—灰白—灰褐色粗砂となる。

調査区北壁西端部 (E-F) でもSD 10溝、SD 16溝、SD 05溝による溝跡がうかがえるが、西端部は弥生時代前期以前の流れがみとめられる。基本的層序はSD 10溝とSD 05溝間において、第1層—表土、第2層—床土、第3層—黒色—黒褐色砂質土、第4層—暗青灰色粘質土 (上面標高20.9m)、第5層—暗緑色シルト、第6層—青灰色礫層 (中位段丘面—上面標高20.2m) となっている。

以上調査区での各壁面の基本的層序をみてきたが、D-E、E-F面で一部に欠落する上層部分がある以外は殆どレベル、層序ともに共通している。

特に青灰色粘土および青灰色礫層 (中位段丘) は全域に良く残り、試掘によれば下層の礫層は東端部では地表面より—60cm程の水準まで上昇している。

またD-E面では表土以下青灰色粘土面までの堆積がかなり砂質であり、SD 16溝とこれと連絡する第23次調査区の溝側がかなり頻りに氾濫のある状態にあったことが窺われ、SD 16溝の急激な蛇行から、第23次調査区の溝が本流であり、本溝は分流である可能性が考えられる。

1 縄文時代の調査

概要 調査区東半部の室町時代以降の水田址調査後に遺構検出面の地山（黄褐色砂質土～礫層）が西側に従って下降するものと考え、重機による掘下げを行っている際に縄文式土器細片が多く混じる淡黄褐色シルト層が調査区南壁中間より西側一帯に広く分布することが判り、手作業による調査に切り変えた。

調査は南端部を中心として西北部にまたがるほぼ1000㎡について行ったがSD 06・02溝などの後代遺構によって破壊を受けていた。

調査によって南端部付近に不整形な土壌3基を検出したが、土器、石器類もまたこの土壌を中心とする部分に分布が濃く、包含層である淡黄褐色シルト層が南側に従って厚くなる点で生活遺構を含む本格部分は更に南側に偏しているものと考えられる。

遺物出土位置のドットマップにおとし得た資料および包含層での採集資料は総数444点となる。

1. 検出遺構 (Fig. 5～7)

調査によって得られた生活関連遺構は3基の不整形土壌である。埋土は何れも淡黄褐色シルトに若干の炭化物を混じるものである。

SK 01土壌 (Fig. 5) 本土壌はほぼ東西に主軸をとり、平面形長方形をなす。長径1.6m、短径1m、深さ25cmを計る。

SK 02土壌 (Fig. 6) 本土壌はSK 01土壌北に隣接し、西側に幅広い不整形をなす。

長径2m、短径1～1.8m、深さ22cmを計る。床面に径20cmの小堅穴がある。土壌内埋土中の上面に浮いて計23点の資料が出土した。

SK 03土壌 (Fig. 7) 本土壌もまた北東より南西に長い不整形をなし、長計3.5m以上最大幅2m、深さ20cm程を計る。埋土中には17点の資料が出土した。また埋土には特に西側部分に炭化物が多く混じていた。

2. 出土遺物 (Fig. 8～14, PL. 15～21・25)

土器 (Fig. 8～11, PL. 15～21)

包含層調査および遺構埋土で出土した土器類は形態および文様構成、器面調整からV類に区別される。

第I類 (Fig. 8・同9の00003を除く)

キャリパー状の口縁をもつ深鉢形土器で、器壁5～6mm程度をはかる。器表面は全て地文が縄文である。然りは全てRで、筋が良く整った長大な圧痕が縦方向に走るものである。

口縁部および円筒部にはこの上に低い、幅5mm程の突帯を弧状・平行に貼付け、「C」字形の

爪形文を施す。また口縁内面にも外面と同様の縄文を施し、先端部は精緻な爪形文で飾る。

また胴部下半の円筒部には地文上にアルカ属の貝背部の圧痕を使用し、条線状に施したものがみられる。

内面は胴部との境に鋭い綾を有し、器面は全て丁寧なナデによって滑面となっている。器色は内面淡黄褐色～淡黄灰色を呈し、外面も煤の付着するもの以外は淡黄褐色を呈する。

更に器壁は岡山県里木貝塚出土土々器に比較して全体的に薄手の感触を受ける。焼成も殆ど良好なものが多い。

口縁形態には平口縁となる00275・00279・

00117 (00173と接合) や明らかに波状をなす00177 (00147と接合) ・00277・00183 (00182・00229・00278と接合) がある。

この第Ⅰ類は、和歌山県鷹島遺跡を標式とする縄文時代中期初頭に相当する「鷹島式」土器と考えて良からう。

第Ⅱ類 (Fig. 9 - 00003・Fig. 10)

内外面ともに器面調整が条痕となる深鉢・浅鉢形土器である。

00503・00397・00435・00722・00234を除けば条痕文が外面荒く、内面も同様の調整後ナデを施す。全体に器色は外面黒～黒褐色を呈し、煤が付着する場合が多い。また炭化した残滓が残るものもある。胎土には粗砂の混入が多く、焼成が軟質なものが多い。

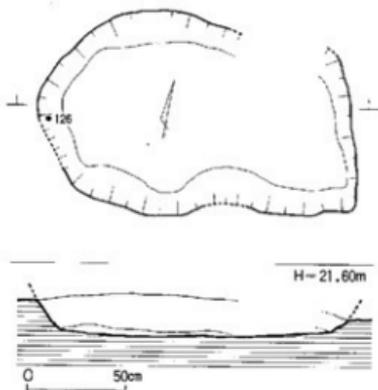


Fig. 5 SK 01土壇出土状況実測図 (1/30)

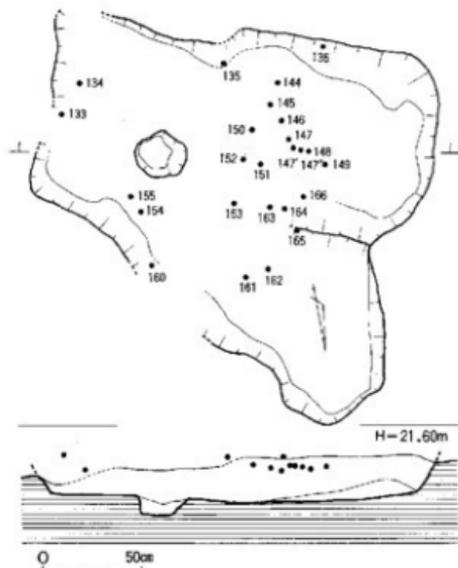


Fig. 6 SK 02土壇出土状況実測図 (1/30)

Ⅲ 調査の記録

同類のうち00003は現存上走部に大型の刻目突部に大型の刻目突帯を施し、胴部中位程に補修孔を有する。また00188 (Fig. 11) は口縁上部部に浅い連続する刻目を施す。

第Ⅲ類 (Fig. 11-00538・01429を除く)

第Ⅲ類は内外面ともに細かい条痕を地文として外面口縁下に2～3条の沈線文(貝殻腹縁刺突文)を施し、口縁端部とのあいだに貝殻腹縁をタテ方向に幅7～10mm程度の間隔で刺突する。

第Ⅲ類の器種は全て深鉢かと考えられるが、口縁は平口縁を有するもの他に00242の如く波状となる可能性をもつものもあり、全体的に薄手で、造りが非常に丁寧である。

器色は淡茶褐色を呈し、胎土に砂粒の混入が多く、焼成は堅緻である。

00503～00234 (Fig. 10) も地文条痕の形状からこの第Ⅲ類に含まれる可能性が高いと思われる。

第Ⅳ類 (Fig. 11-00538)

第Ⅳ類の条痕文鉢形土器とは異なる浅く、弱い条痕文を有するものである。器色は内外面ともに暗褐色を呈し、胎土に若干の細砂を混入する。焼成は堅緻である。

第Ⅴ類 (Fig. 11-01429)

櫛歯状工具による施文を施す深鉢形土器である。胎土には多量の滑石粉を混入する。管煙式

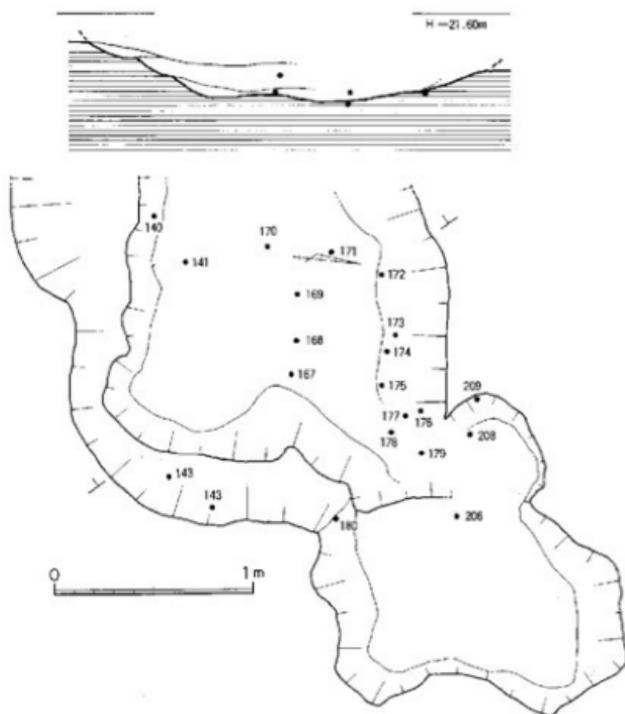


Fig. 7 SK 03.1.城出土状況実測図 (1/30)

1 縄文時代の調査

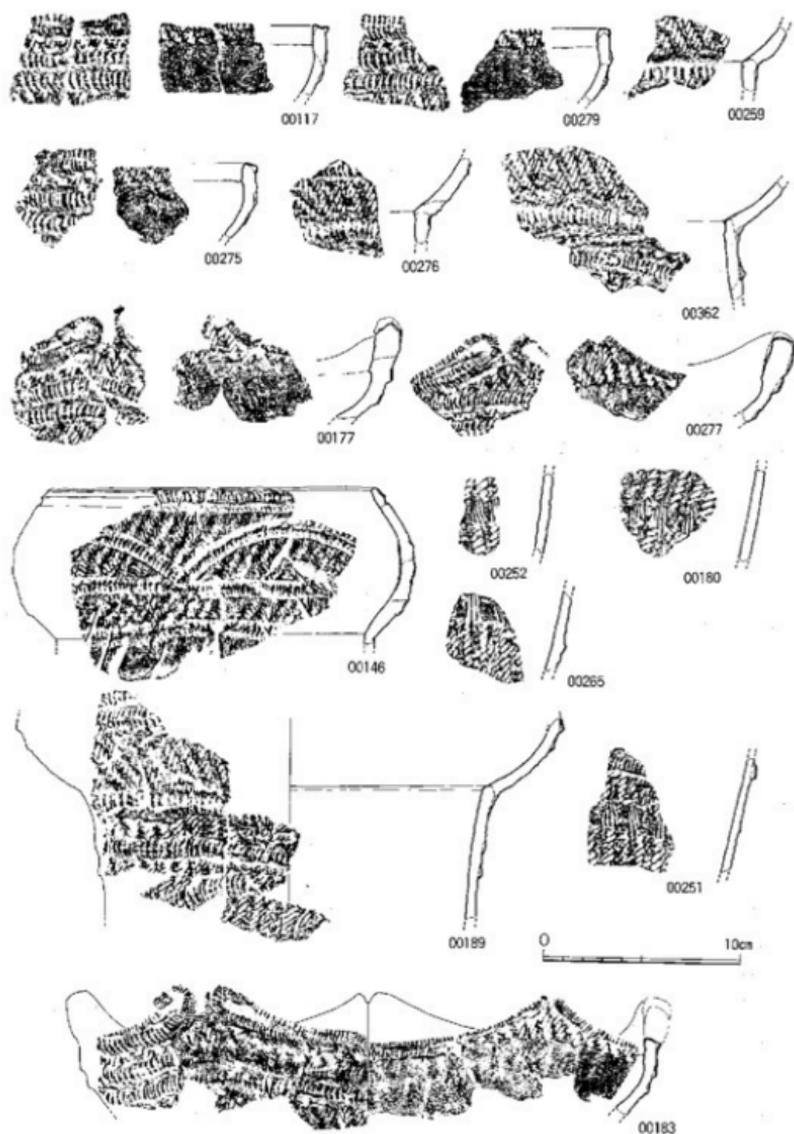


Fig. 8 縄文時代出土遺物尖洞塚1) (1/3)

III 調査の記録

土器である。

以上の図示した第Ⅰ～Ⅴ類の土器は調査によって出土したものに包含層出土・遺構検出面出土のものを混じるが、出土時の位置番号との照号は例言を使用されたい。

石器 (Fig. 12-14, PL. 25)

上記の土器群に伴うと考えられる石器類は打製石鏃、スクレイパー、石槍、磨製石斧、磨石などがある。

打製石鏃 (Fig. 12)

01404鏃は打瘤を基部に使用した剥片鏃であり、主要剥離面側先端にも微調整を加える。全長2.5cm、幅1.3mm、厚さ3mmを計る。

01413鏃は同様に基部に打点を有する剥片利用のものである。基部の腸持りは大きく、深い。全長1.8cm、幅1.4cm、厚さ2mmを計る。

01407鏃は凹基無茎式であるが、全体の磨滅が著しい。全体に調整が丁寧になされている。全長1.7cm、幅1.8cm、厚さ4mmを計る。

01408鏃も両面よりの調整が顕著である。腸持りの形成も丁寧である。全長1.8cm、幅1.4cm、厚さ2.5mmを計る。01401鏃は非常に基部腸持りの大きい、古いタイプのものである。全長2.0cm、幅1.75cm、厚さ2.5mmを計る。

01403・00034鏃はともに石色が淡灰色を有する大分県姫島産黒曜石を使用している。01403は基部を失うが基部挟入の小さいものであろう。00034鏃は、全長2.1cm、幅1.5cm、厚さ3.5mmを計る。

01428鏃は片脚を失うが、脚部のよく開いた凹基無茎式で微調整が丁寧である。全長2.1cm、幅1.5以上、厚さ2mmを計る。

01414鏃はやや大型の腸持りの大きいもので裏面先端部に素材打点を有する。全長2.55cm、幅1.4cm、厚さ4.5mmを計る。

01406鏃は細身で腸持りが小さい。裏面右脚部に打点をもつ。全長2.55cm、幅1cm、厚さ2.5mmを計る。

01418鏃は調整が比較的荒く、腸持りの緩いものである。全長2.75cm、幅1.8cm、厚さ4.5mmを計る。

01409鏃も細身であるが挟入が深く、鋭い。全長2.5cm、幅1.7cm、厚さ2.5mmを計る。

01426鏃も腸持の深い凹基式で片脚を失う。全長1.9cm以上、幅1.25cm、厚さ2.5mmを計る。

00331鏃は先端部を欠失するが腸持りが深く、両側辺が鋸歯状をなす。全長1.9cm以上、幅1.4cm、厚さ3mmを計る。

01427鏃は、腸持部に打点を有する剥片を素材とする。ほぼ片面加工に近い。

01424鏃も先端を失う。基部の持りは浅い。

1 縄文時代の調査

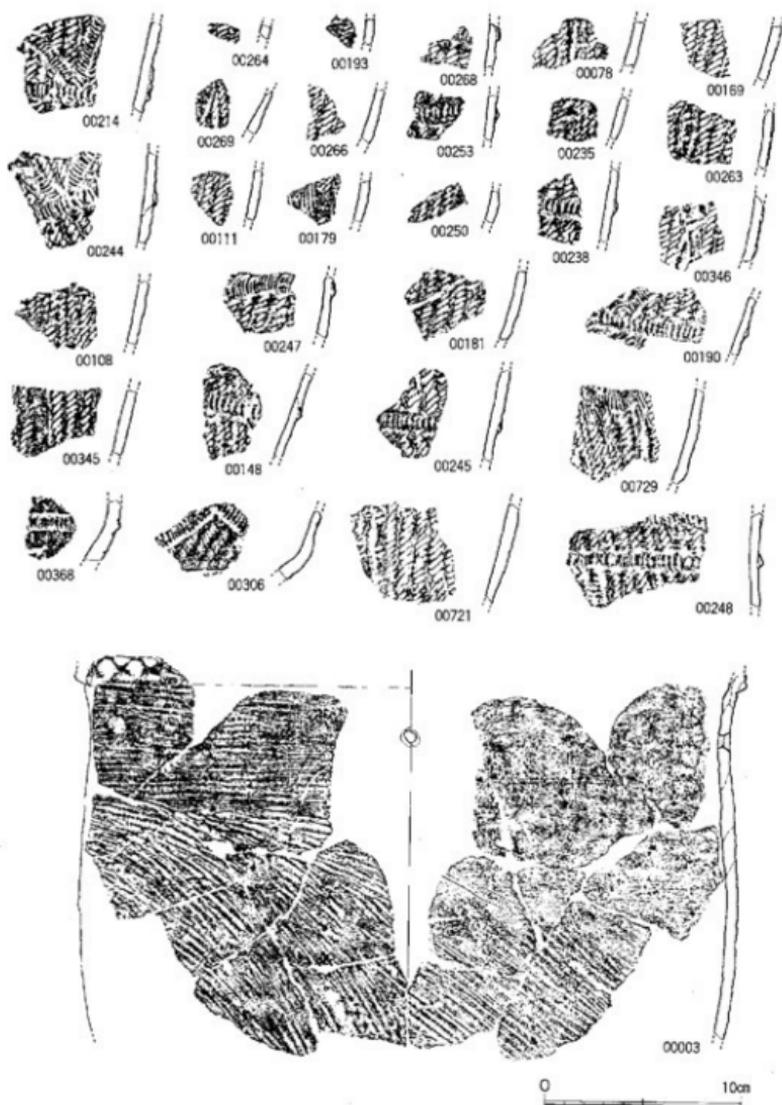


Fig. 9 縄文時代出土遺物実測図(2) (1/3)

目 調 査 の 記 録

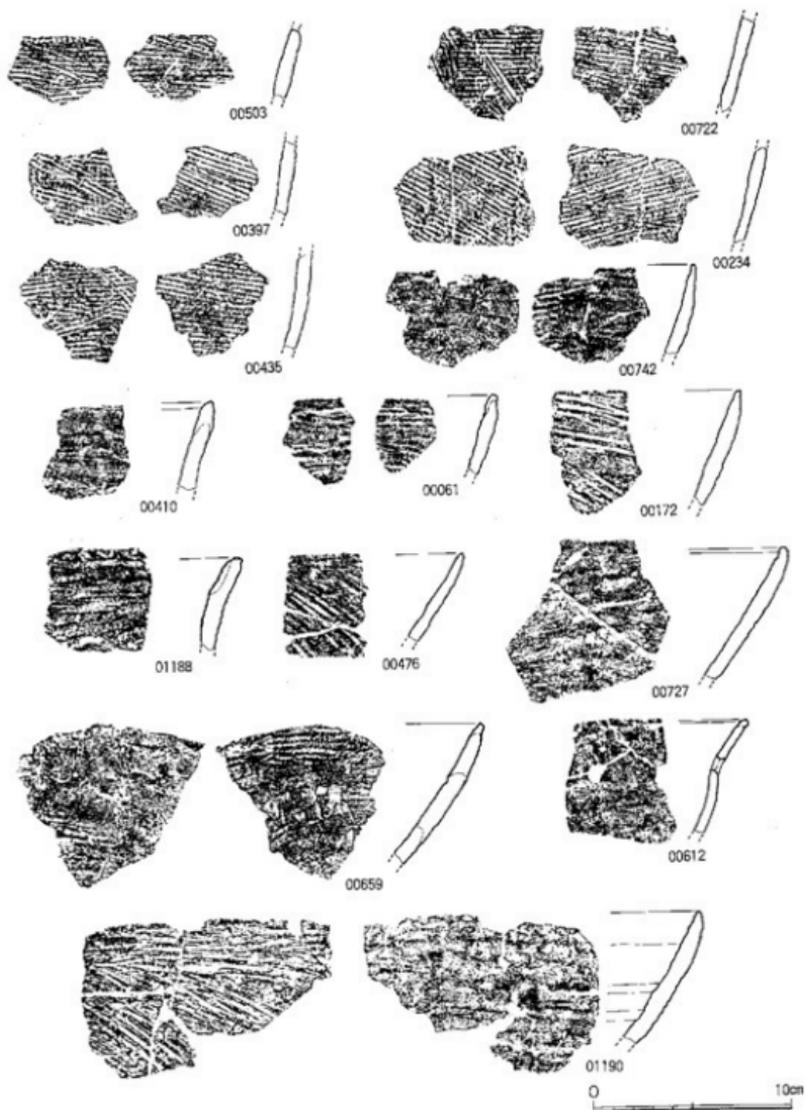


Fig. 10 縄文時代出土遺物実測図3) (1/3)

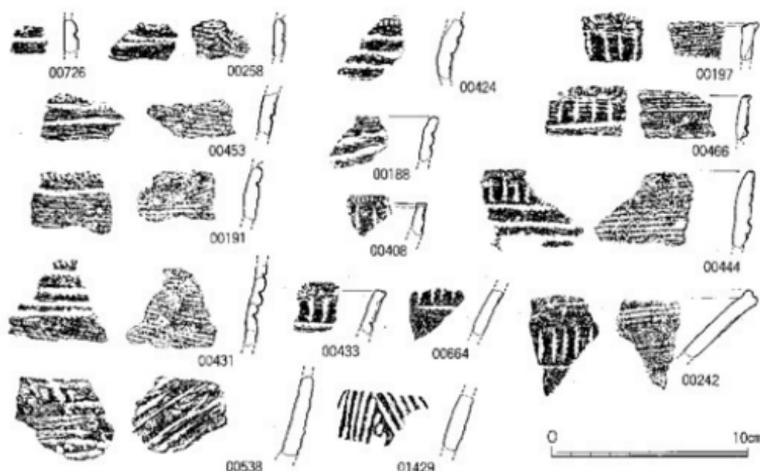


Fig. 11 縄文時代出土遺物実測図4) (1/3)

01410鎌は先端部を欠くが、浅い基部に側辺が中央でくびれる特徴をもつ。現存長2.7cm、幅1.8cm、厚さ4mmを計る。

01423・01425・01419・00112・01417および00297 (Fig. 13) は鎌未成品かと考えられる。

以上は姫島産と特定した以外は全て漂黒色黒曜石を使用している。

01411鎌は基部の腸状の大きい長脚鎌と考えられ、半分が欠損する。素材打点は左脚部付近にあるものと考えられ、側辺の細部加工が顕著である。全長2.7cm、幅不明、厚さ3.5mm程度である。サヌカイト製。

01412鎌は基部腸状の小さい小型のものである。体部の調整は良好であり、断面形は紡錘形をなす。全長2.25cm、幅1.2cm、厚さ3.5mmを計る。サヌカイト製。

01402鎌は基部に全く腸状をもたないタイプで、先端を欠失する。かなり大型のものとなろう。サヌカイト製。

01420鎌は僅かに先端を欠失するが、基部腸状の大きい、扁平なものとなろう。右側辺部に素材打点を有する。また素材表面には礫面を残している。現存長2.6cm、幅2.1cm、厚さ2mmを計る。サヌカイト製。

01415鎌は僅かに先端部を欠失する。内外面ともに粗雑な細部加工である。基部の腸状りは浅く、器厚も大きい。脚部は丸味をもつ。現存長2.1cm、幅1.8cm、厚さ4mmを計る。サヌカイト製。

00166鎌は非常に小型のもので、現存長1.15cmを計る。基部の腸状りは大きく、全体的によ

目 調査の記録

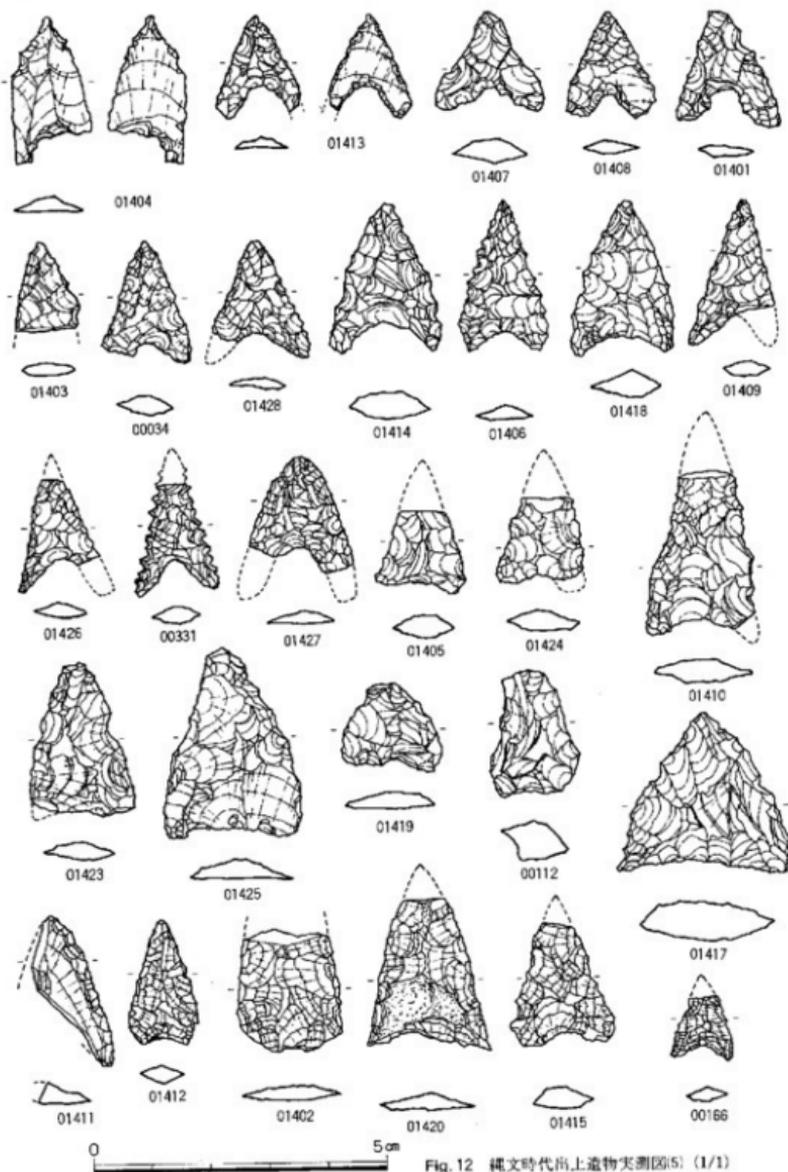


Fig. 12 縄文時代出土遺物実測図5(1/1)

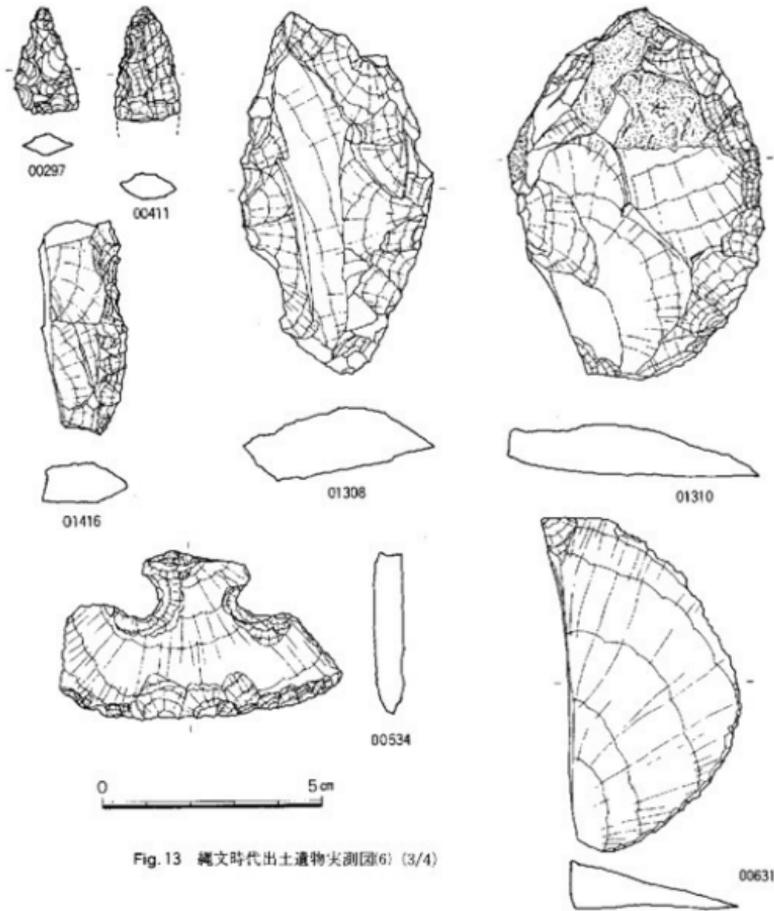


Fig. 13 縄文時代出土遺物実測図6) (3/4)

く整った成形がなされている。幅1.15cm、厚さ2.5mm程となる。サヌカイト製。

石鏃は黒曜石・サヌカイト製の何れもが基部の腸袂りが比較的大きく、一部の剥片鏃を除けば長脚鏃形鏃に類するもので占められる。

石槍 (Fig. 13-00411)

全体の1/2以上失っていると考えられる資料で、厚さ8mmと厚く鏃と考えにくいものである。形態は身幅の狭い小型柳葉形となろう。両面ともに側辺の細部加工は顕著でよく調整されてい

III 調査の記録

る。現存長2.65cm、最大幅1.45cmを計る。サヌカイト製。

搔器 (Fig. 13-01416・01308・01310・00534・00634)

01416は、分厚い板状剥片の両側面に細部加工を施し刃部を造出している。剥片素材の打点は側辺左にある。全長4.85cm、最大幅1.9cmを計る。サヌカイト製。

01308は、側辺部左に打点を有する横長剥片の頭部および末端部に両面より細部加工を施し、図面左側面に刃部を形成している。剥片頭部の加工は打端付近の除去に力が注がれている。剥片打面は自然面である。最大長8.35cm、幅最大4.4cm、厚さ1.4cmを計る。サヌカイト製。

01310は、図中左側面に打点を有し、横長剥片を素材とする搔器である。剥片末端部の細部

加工は片面のみであり、裏面の主要剥離面側には及ばない。全長7.8cm、最大幅5.7cm、厚さ1.1cmを計る。

00631は、図左側面下に打点を有する剥片の末端に僅かに細部加工をして刃部を整えている。剥片縁辺には一部自然面を残す。最大長7.7cm、最大幅3.9cm、厚さ1.1cmを計る。サヌカイト製。

00534は、端部に柄をもつ所謂横型石匙である。柄頭部に打点をもつ横長剥片を素材とし、打端の両側にノッチを施し、末端部両面より細部加工を施して刃部を形成している。自然面を打面とする。最大長3.8cm、最大幅6.4cm、厚さ6.5mmを計る。サヌカイト製。

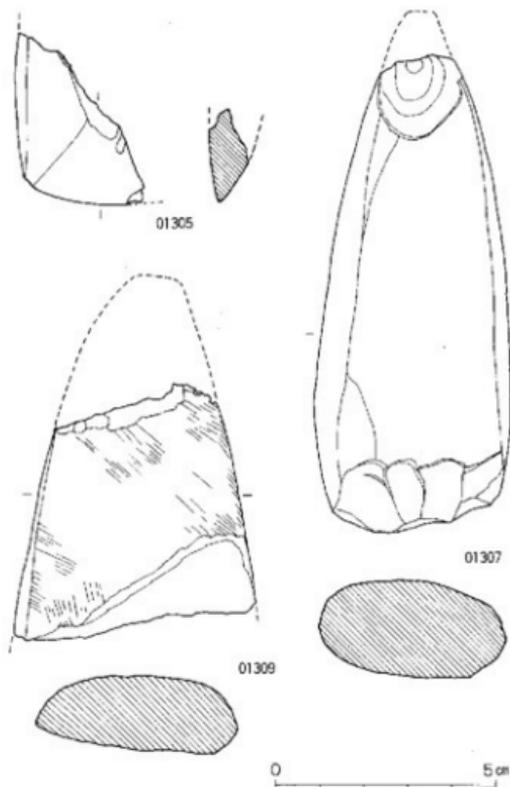


Fig. 14 縄文時代出土遺物実測図(7) (3/4)

磨製石斧 (Fig. 14-01305・01309・01307)

01305は、刃部だけの破片資料である。刃部は両刃であり、扁平性が強い。現存長4cm、同幅2.9cm、厚さ8.5mmを計る。結晶片岩製。

01309は、所謂尖頭蛤刃石斧の頭部破片である。横断面形はいびつで、扁平性の強いものである。片面には成形時の磨削痕が残る。現存長5.85cm、同幅5.45cm、厚さ1.7cmを計る。蛇紋岩製。

01307は、頭部の一部を欠失するがほぼ完形に近い資料である。刃部は使用時の衝撃による剥落で占められる。形状は全体に細身に頭部に従って差々細くなる。石材は玄武岩で風化による器面の軟化が著しい。現存長11cm、最大幅4.4cm、身部厚2.2cmを計る。

石斧類もまた完器に恵まれず破片のみである。他に硬質砂岩使用例もある。更に石器類では他に花崗岩転礫を使用した磨石などがある。

2 弥生時代の調査

概要 調査で検出された弥生時代遺構は溝遺構3条 (SD 01・04・05・SD 16) である。

遺構は何れも調査区西側に偏しており、自然流路と考えられるSD16溝およびこれと連続する河道であるSD16b溝を除けば他は小溝であるが、位置する調査区西側一帯は区内では最も低く、従ってこれらの溝も生活遺構としてよりも寧ろ生産活動に伴う水利遺構と関連するものであろう。

また各遺構のうちSD 01・04・05溝は溝内およびその周辺に特別の施設を伴わず、弥生中期初頭期の土器類が僅かに出土したにとどまっている。

自然流路であるSD 16および16b溝では細い枝状木を矢板で留めた護岸の施設や水利の為のものと考えられる「しがらみ」的施設が遺存している。埋土中より出土した遺物類は弥生前期後半～末の土器、三又鍬・櫛などの農具、木製腕輪などが量的にまとまって出土した。以下では各遺構について詳述することとする。

SD 01溝 (Fig. 3)

本溝は、調査区南西隅を北西から南東方向に走る小溝である。総延長6.5m、幅70～90cmで北西部に従ってやや広がる。深さ40～50cmを計り、埋土は単一で暗黄褐色粗砂である。SD 16b溝 (弥生前期後半) の東岸立あがり部を切る。埋土より中期初頭と考えられる壺形土器片が出土した。

SD 04・05溝 (Fig. 3・15)

両溝は調査区西側をほぼ南北方向に走る小溝である。これらの時期的先後関係については

III 調査の記録

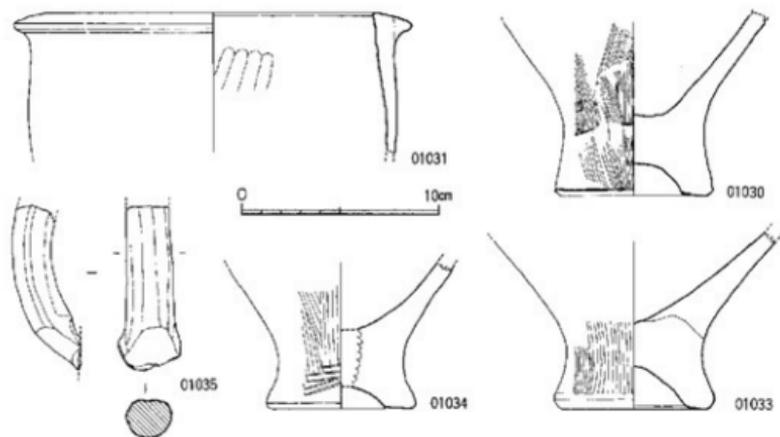


Fig. 15 SD 01・04・05溝出土遺物実測図 (1/3)

各々とも遺存上端面が第Ⅲ層(粗砂を混じる黒色シルト層)下面にあることと埋土が両者とも粗砂質であるなどの共通点が認められ、出土遺物も相似している点ではほぼ同時期と考えて良からう。

SD 04溝は、調査区で延長4m、幅1～1.5m程が確認でき、北側でSD 05溝に合流する。埋土は下部に鉄分の沈澱した黄褐～黄白色粗砂の単一層である。溝壁面は形状が不安定であり、底面近くの凹凸が著しい。深さ30cm前後を計る。埋土中より土器類が若干出土した。

出土遺物 (Fig. 15-01031・01030)

数少ない遺物のうち以上の2点が図化可能なものである。**01031**は口縁外面に粘土を貼付けた小型の平坦口縁を有する甕形土器口縁である。器色は外面が暗黄褐色、内面暗褐色を呈する。器面調整は口縁上端面を横ナデし、内面口縁下に連続する指おさえを残す以外はナデ調整である。胎土は密で、焼成も堅緻である。復原口径20.2cmを計る。

01030は分厚い上底を有する甕形土器底部である。器色は内外面ともに淡灰褐色を呈し、外底部に黒斑が認められる。器面調整は外面に荒い縦刷毛目を施す。胎土には粗砂の混入多く、焼成は堅緻である。底部径8cmを計る。01031とともに弥生時代中期初頭城ノ越式に相当しよう。

SD 05溝はほぼ南北に走る小溝で、延長20m、幅1.75～0.6mを計る。幅員は非常に変移が大きく、同様に壁面・底面の形状も変化が著しいものである。溝は南北両端部では埋土の若干の違いはあるが、横断面形は何れも袋状をなし壁面中位がやや広がる。埋土中より若干の土器類が出土したが、木製遺物はない。

土層 (Fig. 4) SD 05溝は南端部では埋土が2層に区別される。上層は淡黄褐色粗砂～砂礫で、下層は灰色シルトとなる。また北端部でも同様に2層であるが、上層は淡灰色粗砂層に

暗黄褐色砂質土（粗砂多し）のブロックを混じる。下層は灰色シルトと同色粗砂の混在層に黒色砂質土のブロックを混じる。

出土遺物 (Fig. 15-01033-01035)

01033は分厚い上げ底をもつ甕形土器底部である。底部外面に荒い縦刷毛目調整を施す他はナデ調整である。器色は外面淡褐色、内面黒褐色を呈し、焼成堅緻である。復原底部径8.2cmをはかる。

01034も同様の甕形土器底部である。器色は外面が淡褐色、内面褐色である。器面調整は外面に縦刷毛目を残し、底部下端付近では工具端部痕（長さ2cm程）が段状に残る。胎土には粗砂の混入多く、焼成は堅緻である。復原底部径7.6cmを計る。

01035は器種不明の土器把手である。器色赤褐色を呈し、下部部の接合部付近は工具によるナデ(?)で薄くなる。形状は半円状となる程円味を持たないものであろう。横断面形は内面が直線的となるものの他はほぼ円味をもって仕上げられ、ヘラ調整による面取りがみられる。現存長8.4cm、幅2.2~3.2cm、厚さ2cmを計る。

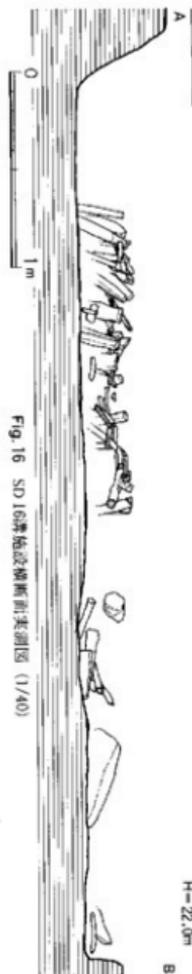
以上SD 05溝に伴う土器類も中期初頭の所産である。

SD 16溝 (Fig. 16-23, PL. 5・8~12付図3)

SD 16溝は、調査区西端に位置し、北西から南東方向に走る大溝である。調査区内では延長25.5m、幅7.5~10mの規模であり、南・北端部で幅員を広げる。更に南端部から調査対象外地を挟んで検出した溝遺構（SD 16b）があり、埋土の近似性と方向的に12m程の空白部はあるもののこれと一致すると考えられる点で同一の溝遺構と考えれば、南端部の幅員は不詳ながら、延長は45m以上となる。

また本溝は隣接する第23次調査区での状況では直線的に北流せず、西に迂回蛇行するものと考えられている。溝内では特に西岸部にほぼ沿って大型木材を丸杭で留める施設や樹枝状の木材を矢板・丸杭ととめて直線的に仕上げる施設のほか、西岸の北半部では溝上端面から法面にかけて矢板・丸杭などを使用した緩慢な連続性をもつ施設がみられる。

またこれらの施設上や施設より外れる部分の底面には大小の流木や却てはこれらの施設の一部をなしていたと考えられる加工痕のある木材類や直径が50cmを越す大木片などが流下方向を反映する様に数多く



III 調査の記録

堆積していた。これに混じて若干の木製品が出土した。

以下本溝の土層、関連主要施設、出土遺物について触れることとする。

土層 (Fig. 4) 本溝の土層堆積を南端部 (C-D) と北端部 (E-F) とでみる。南端部ではほぼ中央部で中期初頭と考えられる SD 04・05 周溝から最上部埋土を切られており、少なくとも、これ以前に全て埋没したものと考えて良い。埋土は図にみる様にシルトと有機質土との混在層が東・西岸にひろがり、これを切る様に砂-砂礫層の堆積がみられる。

更にこの土層断面で観察されるシルト層、砂層の流下方向を測ると東岸部の N-10°-W とほぼ南北方向であるのに対し、中央部粗砂層で N-50°-W、また西端部で N-90°-W となり東西方向をとる様になり、西側に従って西へ流れる傾向を示している。

次に北壁部では東岸を古墳時代末期溝 SD 10 に切られ立ち上りを失う。また流下方向中央に中州状に残る青灰色粘土を挟んで2つに流れが分れ、西岸部では立あがり上端面より更に西側に流域が広がっており、有機質を含む暗灰色粘土で埋められるが、中央部の流れは南壁部の状況と同様に粗砂の多い堆積物が埋土となっている。

溝に伴う主要な施設

本溝では延長25mのうち特に西岸部に近い部分に溝利用に関連すると思われる施設が見付かった。

まず南端部では直径50cm以上、長さ3m程の大型木材を西岸の縁辺に沿う様に配置し、これを直径が3-5cm程度の丸杭を周囲に打って固定した施設がみられる。次に南走から北へ6-7m程のほぼ溝中央に並列する2列の矢板群が流れに沿う南北方向に配置されている。両群はその配列が平行するものではなく、南側で八字形に開く。従って北側では相接する程になっている。西側列は延長が約5.5m程であり、南側は破損が著しく本来の形状をとどめないが、北側は保存が良く、矢板を主として使用する。矢板は殆どのが頭部が東側に傾斜している。更に東側列は細い枝状の木材で最長1.5m程のものを南北に横たえ、これを矢板と比較的大型の丸杭・半割材使用杭で固定している。西側列に比較して杭のサイズが大きく、念入りな工作が窺える。延長8.5m程が残る。これらは何れも溝中では位置的に岸辺より中央に寄っており、護岸の機能をもつものであれば変移する溝幅員の固定のための工作と考えられよう。

次に南端部より西岸に沿って15m程の部分から以北には矢板・丸杭を溝上縁部および法面に多く打っている。これは他に関連する遺構もない点で護岸を目的とした工作と考えることができよう。

出土遺物 (Fig. 18-23) 本溝で出土した遺物は、突帯文土器、弥生式土器甕・壺形土器などの土器類と木器類 (三又鉞・槽・腕輪) とである。これらのうち土器類は、流木層より下層の砂層に多く、位置的には東岸の下遊線付近に集中して出土したが、砂層のため出土層位を十分明らかにし難い。

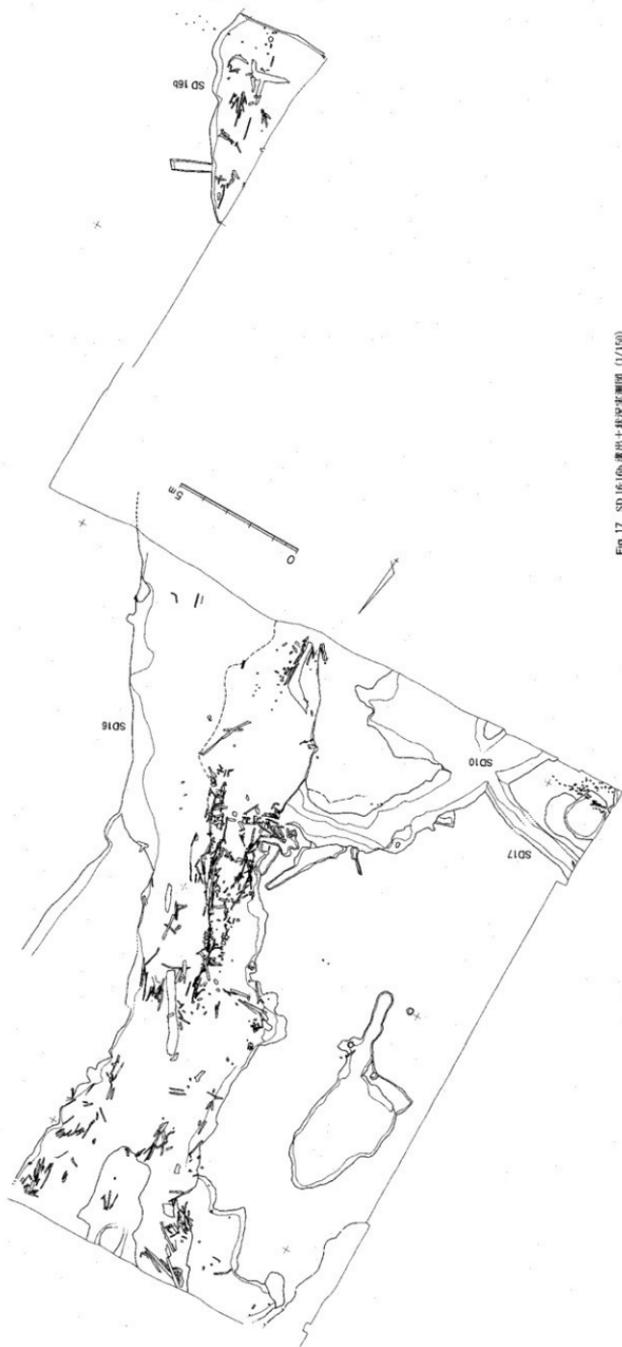


Fig 17 SD 1616. 清出土坑深溝區 (1/150)

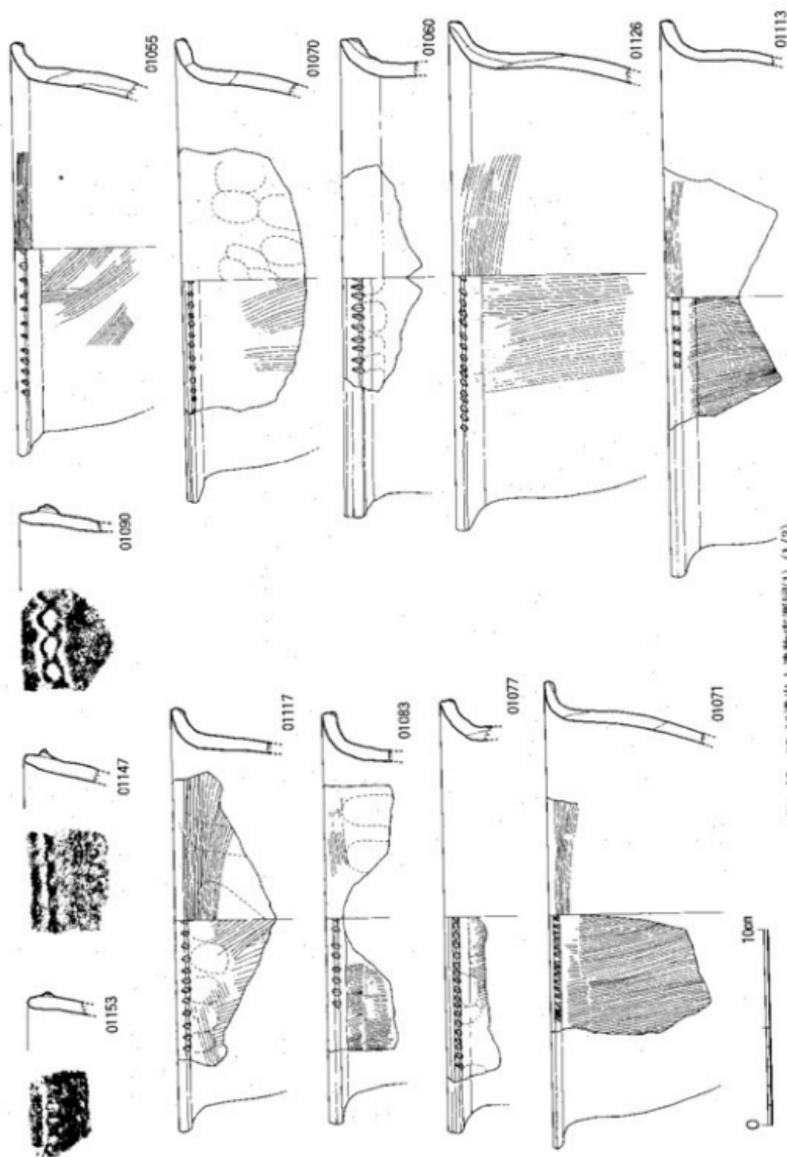


Fig. 18 SD 16出土土器形式図(1) (1/3)

III 調査の記録

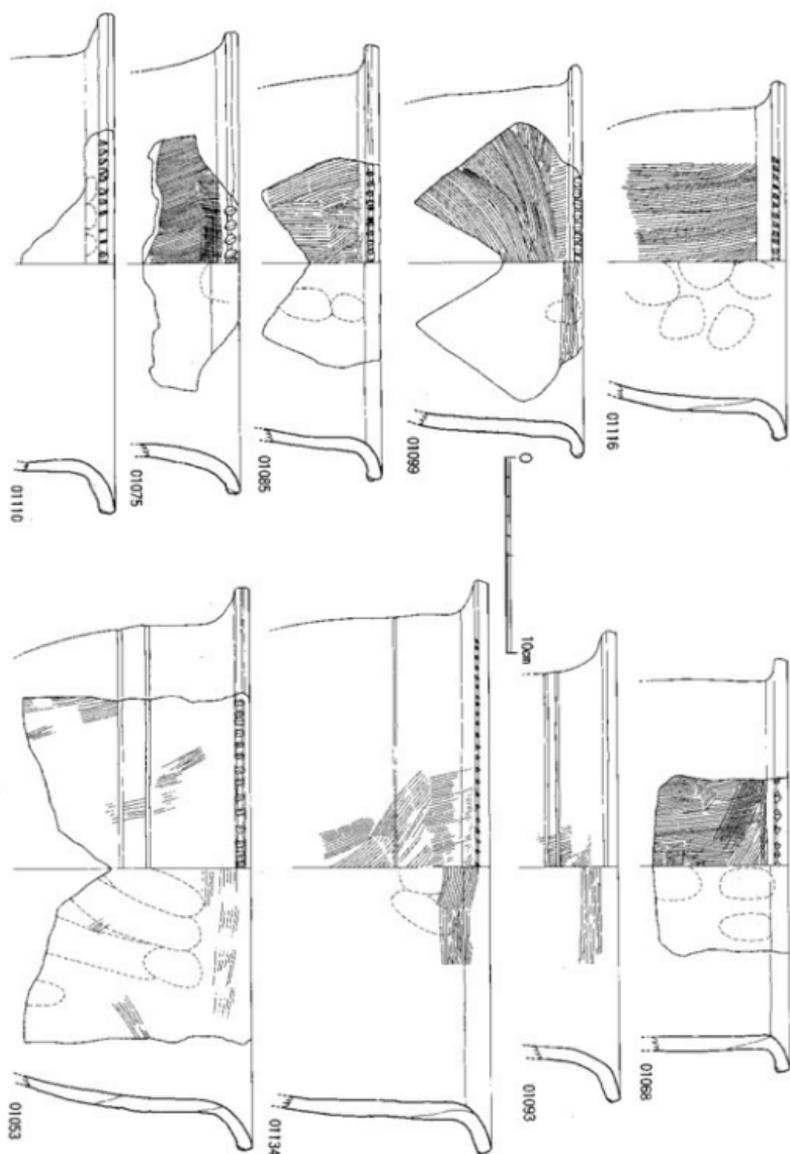


Fig. 19 SD 16出土土遺物実測図(2) (1/3)

土器 (Fig. 18~21, PL. 21~24)

土器は、埋土である黒色有機質土とこれ以下の粗砂層で主に出土したが、全体にローリングによる器面の磨滅は顕著ではなく、今回調査区とそれほど遠くない上流地域（南部側）に生活舞台が広がっているものと考えられる。

土器は、突帯文土器、弥生式土器甕（A～C類）・同壺形土器および底部である。以下各土器の特徴について述べることにする。

突帯文土器 (01153・01147・01090・01090) は、全て壺形土器の口縁部小破片である。口縁部よりやや下がった位置に一条の刻目突帯を施す夜白式土器で、他の土器類と比較すると器面の磨滅がみられる。

次に**弥生式土器**は甕が多量で壺他が少量である。甕では口縁部および突帯形態によってA～C類に区別できる。

A₁類は出土量が最も多く、如意状口縁を有し、口縁部外端に限って刻目を施す。相当土器は、01117・01083・01077・01071・01055・01070・01060・01126・01113・01116・01099・01085・01075・01110・01068である。またA₁類の鉢形土器01088もある。

A₂類は、如意状口縁を有し、口縁部に刻目を持たないものと、下部部に刻目を持つものがあり、口縁下に1～2条の沈線文を施すものである。(01093・01134・01053)

A₃類は、如意状口縁を有し、口縁部に刻目を持たない。(01080)

B類は、如意状口縁の外下部部に刻目を施し、更に口縁下に一条の刻目突帯を廻らす。相当土器は、01139・01059である。

C類は、小さい平坦口縁外端部に刻目を施し、更に口縁下には比較的幅広く、低い刻目突帯一条を廻らす。相当土器は、01141・01136・01059・01149・01138である。

壺形土器のうち01096は、口縁部小破片で上部部外面に断面三角形の突帯をつくり出す。内面はやや窪み、器面は何れも横ナデである。器色は褐色を呈し、焼成は堅緻である。突帯文系のものであろうか。

A₁類は、小破片が多く復原口径18.5～28.7cmと幅をもち、口径に差のある群があると考えられるが平均的に23.1cm程となる。器面調整は外面縦刷毛目調整後に口縁下横ナデを施す。内面は口縁部を横刷毛目調整後殆どの場合ナデで消し、胴部～口縁にかけて指おさえがみられる。

A₂類は、3点のみであるが復原口径24.3・29・29.5cmをはかり、A₁類と比較して口径が大きい。器面調整は外面細かい縦刷毛目を施し、この後にナデ調整を加える。また器面の荒れによって消失する部分もある。沈線文は調整後である。また内面は口縁部付近に横刷毛目を痕跡的に残し、他に連続する指おさえがみられる。

A₃類は、小破片のため口径は明らかではない。口縁外端に粘土を貼付けやや肥厚させる。外面に細かい縦刷毛目を施す。

III 調査の記録

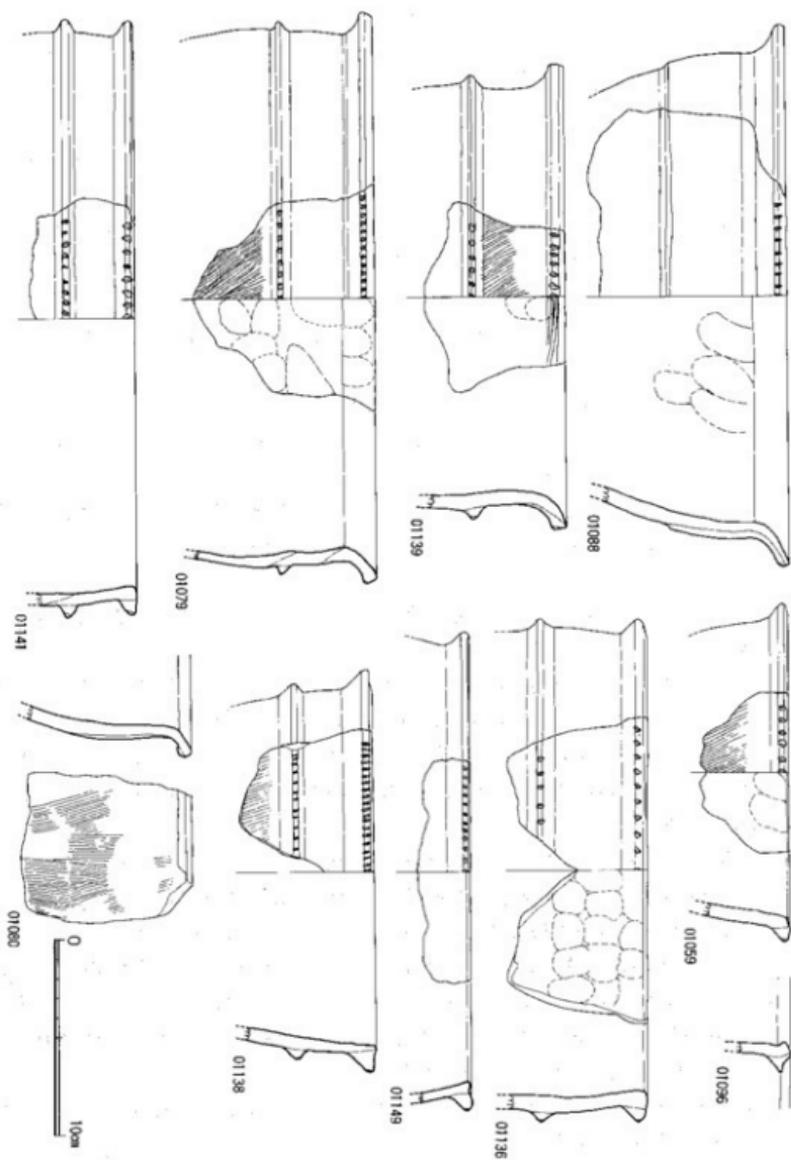


Fig. 20 SD 16系出土遺物実測図3 (1/3)

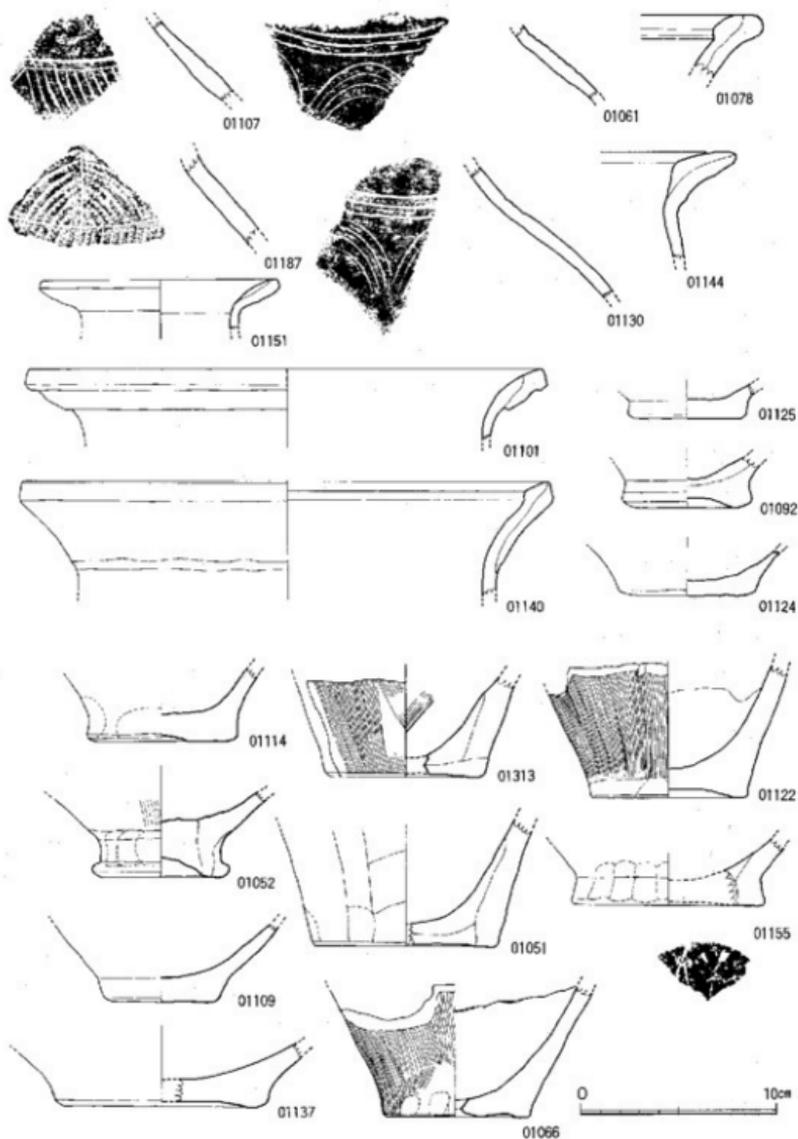


Fig. 21 SD 16溝出土遺物実測図(4) (1/3)

III 調査の記録

次にB類は、2点のみである。復原口径23.8・29.5cmを計る。口縁下および胸部突帯以下には細かい縦刷毛目調整を施し、口縁下では横ナデによって帯状に消し去る。また内面は不定方向の指おさえが残る。

C類では、復原口径が17.4~30.6cmと変幅が大きい平均的には24cm程度のサイズとなる。口縁と胸部突帯間は基本的に刷毛目調整が消し去られると考えられ、突帯以下には縦刷毛目が残される。

壺形土器は裏より出土点数が少なく、底部を除けば9点を図で示し得た。(Fig. 21-01107・01061・01187・01130・01078・01144・01151・01101・01140)

01107は、肩部にヘラによる有軸羽状文を施す。器色は暗褐色を呈し、焼成堅緻である。胎土に径1mm程の粗砂の混入多し。調整は内外面ともにナデである。**01061**も肩部に3条のヘラ描き沈線文を廻らし、この下に4本単位の連弧文を施す。器色は外面暗茶褐色、内面淡茶褐色を呈し、焼成は堅緻である。胎土に1.5mm程の粗砂の混入多い。内面に指おさえが残る。

01187は、同様に壺肩部破片である。器壁はやや厚い。器色は外面褐色。内面灰褐色を呈し、焼成は堅緻である。外面に施紋する有紋土器である。ヘラによる一条の横沈線に直交する様に縦位沈線を施す。こうして区画された部分に貝殻腹縁と思われる工具による半円形の文様を上部に、また横沈線以下のものは波状となるものか。

01130は、01061と同種の文様構成である。器色は、外面赤褐色、内面暗褐色を呈する。胎土に径1~4mmの砂混入するが、焼成堅緻である。

01078は、口縁内面に粘土貼付によって平坦化する傾向のみえる壺である。口縁部外端に細かい刻目を施す。器色は、外面淡褐色、内面暗褐色を呈し、焼成軟質である。**01144**も口縁内面に厚く粘土を貼る異形の土器である。器色は、外面灰褐色、内面淡黄褐色を呈し、焼成はやや軟質である。胎土に径1~2mmの砂粒の混入多し。



Fig. 22 SD 16清出土物実測図51 (1/2)

01151は、小型壺口縁である。口縁内面に粘土の貼付を行い、肥厚させている。器色は外面暗灰褐色、内面褐色である。焼成は堅緻である。口径12.2cmを計る。**01101**も口縁端部に粘土を貼付して肥厚させる壺口縁である。器色は内外面ともに淡赤褐色を呈し、焼成は堅緻である。口径26cmを計る。**01140**は口縁外に段を有し、また内面端部も肥厚して段をなす。器色は外面が淡黄褐色、内面が淡灰褐色を呈し、焼成は堅緻である。器面調整は横ナデである。口径26.8cmを計る。

他に底部では壺形土器のものを多く図示した (Fig. 21)。壺では円盤貼付底を含む小型のもの (01125・01092) や通

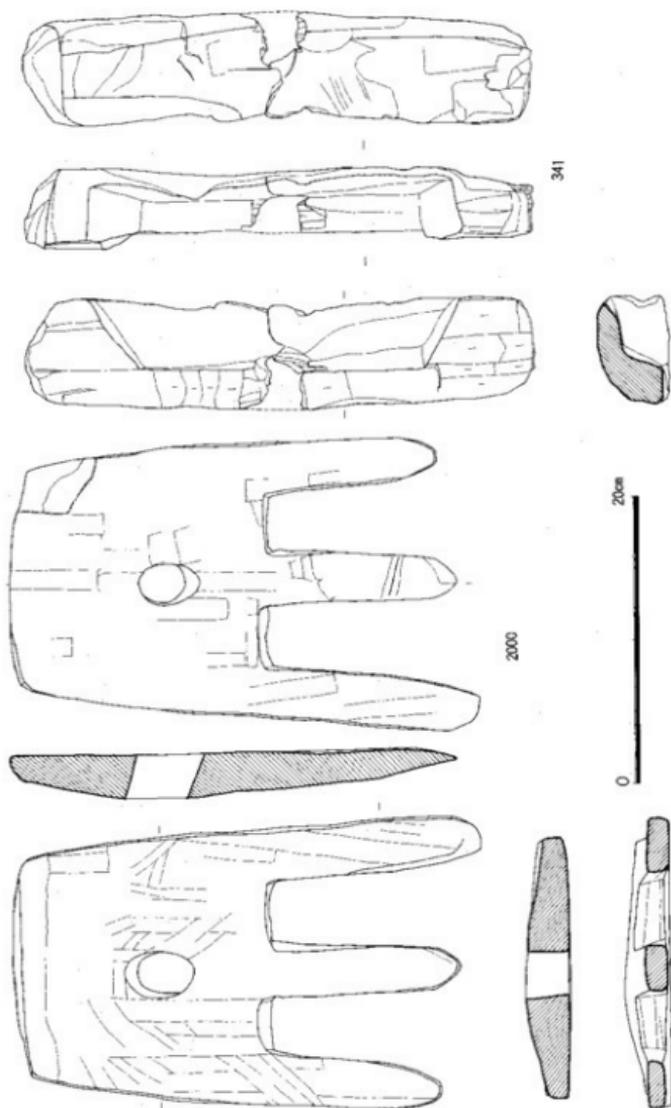


Fig. 23 SD 16藤州土遺物実測図(6) (1/4)

II 調査の記録

Tab. 2 SD 16溝出土木材鑑察表

番号	器種	加工法	法量 (cm)			樹種	備考
			長	幅	厚		
200	流木						
201	◇						
202	杭	角材	52.5	8		不明	広葉樹
203	◇	丸材	46	3.5	散孔材		
204	◇	◇	42	3.5	散孔材		
205	◇	◇	12	3	散孔材		
206	◇	◇	30	3.5	散孔材		
207	◇	◇	34	5.0	散孔材		
208	◇	◇	35.5	5	散孔材		
209	◇	◇	18.5	3			広葉樹
210							
211	杭	板状割材	42	6	環孔材		
212	◇	◇	36	3	散孔材		
213	流木						
214	杭	板状割材	48	10	環孔材		
215	◇	丸材	18	4	散孔材		
216	◇	◇	28	4.5	散孔材		
217	◇	◇	22.5	3	散孔材		
218	流木						
219	◇						
220	◇						
221	杭	丸材	28	2.5	散孔材		
222	◇	角材	30	11.5	環孔材		
223	流木						
224	◇						
225	杭	丸材	15.5	3.5	散孔材		
226	◇	◇	21	5	散孔材		
227	流木						
228	木器		19.5	3	散孔材	Fig.	ハイノミ製 三ノミ製?
229	杭	丸材	14	3	散孔材		
230	流木						
231	杭	丸材	11	4	散孔材		
232	流木						
233	杭	丸材(?)	27	3	散孔材		
234	遺木(?)						
235	杭(?)	丸材	17.5	3	環孔材		
236	杭(?)	◇	33	3	環孔材		
237	杭	◇	52	13	散孔材		
238	杭(?)	丸材(?)	14	3	環孔材		
239	杭	板状割材	47.5	13	散孔材		
240	◇	◇(?)	30.5	8	環孔材		
241	◇	角材	36	9	環孔材		
242	流木						
243	杭	板状割材	17	6	環孔材		
244	◇	半割材	34.5	9	環孔材		
245	◇	板状割材	10	8.5			
246	流木						
247	杭	板状割材	35	4	散孔材		
248	◇	半割材	55	7	環孔材		
249	◇	板状割材	88.5	9	環孔材		
250	流木						
251	杭	半割材	21	8	環孔材		
252	◇	角材	28.5	4.5	環孔材		
253	◇	板状割材	36	8.5	環孔材		
254	◇	◇	37	5	環孔材		
255	杭(?)	◇(?)	31	6	環孔材		
256	杭	丸材	30.5	3	散孔材		
257	◇	板状割材	29	7	環孔材		

2 弥生時代の調査

258	杭	丸材	36	6				○ 散孔材
259	+	板状割材	41.5	10	3			○ 環孔材
260	+	+	37.5	8	3.5			○ 環孔材
261	+	角材	89	3.5				○ 環孔材
262	+	板状割材	77	10.5				○ 環孔材
263	+	半割材(?)	20	8.5				○ 環孔材
264	+	丸材	36.5	5				○ 散孔材
265	+(?)	+	20	4				○ 散孔材
266	流木							
300	+							
301	+		30	18				
302	+							
303	杭(?)	丸材(?)	7	2.8				
304	+	丸材	5	4.5				○ 環孔材
305	杭	+	8	5.5				○ 散孔材
306	+	+	9	5				○ 散孔材
307	流木							
308	+							
309	+							
310	杭	板状割材	28.5	9				△
311	流木							
312	+							
313	杭	板状割材	30	11				○ 散孔材
314	杭(?)	角材	33	7				△
315	杭	+	20	4.5				○ 散孔材
316	流木							
317	杭(?)	丸材	30	4.5				○ 環孔材
318	流木							
319	杭	板状割材	25.5	10	1.5			○ 環孔材
320	流木							
321	+							

322	杭	板状割材	20.5	10.5	2.8			○ 環孔材
323	+	+	15.5	1.1	2.7			○ 環孔材
324	流木							
325	杭	板状割材	29	9	4.8			○ 環孔材
326	流木							
327	+							
328	+							
329	+							
330	+							
331	+							
332	+							
333	+							
334	+							
335	杭(?)	板状割材	52	4				○ 環孔材
336								
337	流木							
338	+		50	7				
339	杭	丸材	56	5				○ 散孔材
340	+(?)	半割材(?)	22.5	7				○ 散孔材
341	木製品	楕	35	7				○ 散孔材 ゴングイ
342	流木		41	4				
343	+							
344	杭	半割材	28	6.5				○ 環孔材
345	+	丸材	32	4.5				○ 散孔材
346	流木							
347	杭	半割材	55.5	8				○ 環孔材
348	+	板状割材	24	9				○ 環孔材
349	+	丸材	35	3.5				○ 散孔材
350	+	+	30	4				○ 散孔材
351	流木							
352	+							

目 調 査 の 記 録

353	杭	板状割材	21.5	9	○ 環孔材					
354	杭(?)	丸材	23.5	3.5	○ 散孔材					
355	杭	○	24.5	4	○ 環孔材					
356	○	○	28	8	○ 散孔材					
357	○	角材	37	7	○ 環孔材					
358	流木									
359	杭	板状割材	47	11.5	○ 環孔材					
360	杭(?)	○	44	18.5	○ 散孔材					
361	杭	○	32.5	7.5	○ 環孔材					
362	○	○	33	11	○ 環孔材					
363	○	丸材(?)	5.5	4	○ 散孔材					
364	○	丸材	4.5	3.5	○ 散孔材					
365	流木	板状割材	4.5	0.8						
366	杭(?)	丸材	33	3.5	○ 散孔材					
367	流木	丸材	62.5	4						
368	○	○								
369	○	○	17.5	3						
370	○	○								
371	○	○	49.5	4						
372	○	丸材								
373	○									
374	杭	丸材	38.5	4	○ 散孔材					
375	杭(?)	○	5.5	1.5						
376	流木									
377	杭	丸材	10	2.5	○ 環孔材					
378	○	板状割材	24	10	○ 散孔材					
379	○	半割材	26	6	○ 散孔材					
500	杭(?)	割材	15.1	3.5	○ 散孔材					
501	杭	丸材	30	3	○ 散孔材					
502	○	○	22	3	○ 散孔材					
503	○	○	24	4	○ 散孔材					
504	流木									
505	杭	割材	6	5						209に似て いる広葉樹
506	流木									
507	杭(?)	割材	16	2.5	○ 環孔材					
600	流木									
601	○									
602	○	丸材								
603	○	○	50	3						
604	杭	角材	36	6.5	○ 散孔材					
605	○	半割材(?)	23.5	6.5	○ 散孔材					
606	○	丸材	42	5.5	○ 環孔材					
607	○	角材	40	5	○ 環孔材					
608	○	丸材	26	4	○ 散孔材					
609	○	○	21	3	○ 散孔材					
610	流木									
611	杭	角材	60	8	5	○ 環孔材				
612	○	丸材	42	4	○ 散孔材					
613	○	○	23	2.5	○ 散孔材					
614	○	○	36.5	3.5	○ 散孔材					
615	○	○	24	4	○ 散孔材					
616	○	角材	50	9	6.5	○ 環孔材				
617	○	半割材	29	9.5	○ 散孔材					
618	流木									
619	○									
620	○									
621	杭	板状割材	38	9.5	○ 散孔材					
700	流木									
701	杭	丸材	30	5	○ 散孔材					
702	流木									
703	○									
704	杭	板状割材	25	9	○ 散孔材					

Ⅲ 調査の記録

862	流木								
863	杭(?)	板状割材	15	7					
864	流木								
865	杭(?)		55.5	5				○ 環孔材	
866	流木(?)	半割材	31	5					
867	流木	割材							
868	○								
869	杭	丸材	17	2.5				○ 環孔材	
870	○	板状割材	16.5	10	4.5			○ 環孔材	
871	○	○	28	7				○ 環孔材	
872	○	○	27	7.5	3.2			○ 環孔材	
873	○	○	32.5	6				○ 環孔材	
874	○	○	33	8.5	3			○ 環孔材	
875	○	○	33	4.5	2.5			○ 環孔材	
876	○	丸材	27.5	4				○ 環孔材	
877	○	板状割材	25.5	5.5				○ 環孔材	
878	○	○	32.5	5.5				○ 環孔材	
879	○	○	21	8.5	3.5			○ 環孔材	
880	○	角材(?)	50.5	6				○ 環孔材	
881	○	板状割材	27	2.5				○ 環孔材	
882	○	丸材	29.5	3				○ 環孔材	
883	○	○	10	2				○ 環孔材	
884	流木		42	4					
885	杭	丸材	21	3				○ 環孔材	
886	流木								
887	不明		13.5	13					
888	杭	角材	71	10	4			○ 環孔材	
889									
890	杭	角材	47.5	6.5				○ 環孔材	
891	杭(?)	板状割材	46	7				○ 環孔材	
892	○	角材(?)	14.5	3				○ 環孔材	

893	杭	板状割材	37.5	10.5	5			○ 環孔材	
894	○	丸材	29	3				○ 環孔材	
895	○	○	37	4.5				○ 環孔材	
896	○	角材	10	5				○ 環孔材	
897	流木								
898	杭	板状割材	23	6					
899	杭(?)	角材(?)	28	4				○ 環孔材	
0800	杭	板状割材	21	6					
0801	流木								
0802	不明	板状割材	8	4					
0803	流木								
0804	杭	角材	16.5	7.5	3.5			○ 環孔材	
0805	流木								
0806	杭	丸材	30	6				○ 環孔材	
0807	流木								
0808	○								
0809	不明(?)	(板状)	22.5	7.5				○ 環孔材	クリ
0810	杭	丸材	46	7.5				○ 環孔材	
0811	杭(?)	板状割材	26	15				○ 環孔材	
0812	流木								
0813	○								
0814	○								
0815	杭	板状割材	19	12				○ 環孔材	
0816	流木								
0817	流木								
0818	○								
0819	杭	板状割材	40	10	6			○ 環孔材	
0820	杭(?)	半割材(?)	32	6				○ 環孔材	
0821	杭	板状割材	61	11				○ 環孔材	
0822	○	○	18	7				○ 環孔材	
0823									

2 弥生時代の調査

0824	流木								
0825									
0826	流木								
0827	杭	板状割材	29	10					樹皮?
0828	杭(?)	丸材	101	7.5	5.5				環孔材
0829	杭(?)	丸材	27	3.5					散孔材
0830	流木								
0831									
0832	流木								
0833	*								
0834	*								
0835	杭	板状割材	17	4					環孔材
0836	流木								
0837	杭(?)	丸材	14	3.5					散孔材
0838	流木								
0839	*								
0840	杭(?)	丸材	27	2.5					広葉樹
0841	流木								
0842	*								
0843	*								
0844	*								
0845	*								
0846	*								
0847	杭	丸材	51	2					散孔材
0848	*	角材	85	7	6				環孔材
0849	*	*	142	8.5	5.5				環孔材
0850	*	丸材	67	2					散孔材
0851	*	*	35	4					散孔材
0852	*	角材	75.5	6.5	6.5				環孔材
0853	*	丸材	13	3					散孔材
0854	流木								

0855	杭	丸材	42	2					散孔材
0856	*	角材	21	5					環孔材
0857	*	半割材	36	5					環孔材
0858	*	*	36	5.5					環孔材
0859	*	角材	8	4					環孔材
0860	*	板状割材	21	6.5					環孔材
0861	*	角材	22	6					環孔材
0862	*	丸材	21.5	5					散孔材
0863	*	角材(?)	21	4					環孔材
0864	*	丸材	25	6					散孔材
0865	流木								
0866	*								
0867	*								
0868	杭	丸材	32	3.5					散孔材
0869	*	*	25.5	4.5					散孔材
0870	*	角材	15	8					環孔材
0871	木製品(?)	板状	16	4	1				散孔材 カキノキ属
0872	流木								
0873	*								
0874	*								
0875	杭	丸材	28	3.5					環孔材
0876	*	板状割材	32.5	9					環孔材
0877	流木								
0878	木製品								
0879	杭	丸材	35	3.5					マフ
0880	*	*	19	2.5					散孔材
0881	流木								
0882	*								
0883	杭	丸材	15.5	5.5					散孔材
0884	杭(?)	*	33	6					環孔材
0885	杭	*	8	3.5					環孔材

III 調査の記録

0886	流木								
0887	◇								
0888	杭(?)		21	4				環孔材	
0889	流木								
0890	杭(?)	不明	45	9				環孔材	
0891	杭	板状割材	43	8				環孔材	
0892	◇	◇	44	8				環孔材	
0893	流木								
0894	◇								
0895	◇								
0896	杭(?)	丸材	48	3.5				散孔材	
0897	線型(?)	板状	27	2.5	1.5	△	イヌマキ		
0898	不明	◇	15	4				環孔材	
0899	流木								
0900	◇								
0901	杭	半割材	11.5	5				環孔材	
0902	◇	丸材	32.5	3				散孔材	
0903	流木								
0904	◇								
0905	◇		70	5					
0906	杭	丸材						散孔材	
0907	流木								
0908	◇								
0909	◇								
0910	杭	丸材	17	5				散孔材	
0911	流木								
0912	杭	半割材	19	6				散孔材	
0913	◇	丸材	59	3				散孔材	
0914	線型(?)	板状	25.5	4.5				散孔材	樹種不明
0915	流木								
0916	◇								
0917	流木								
0918	杭(?)	板状割材	22.5	3.5				環孔材	
0919	杭	丸材	29.5	3.5				環孔材	
0920	流木(?)								
0921	流木	丸材							
0922	木製品		9	13	4			散孔材	
0923	杭	丸材(?)	6.5 ₊₀	2.7				散孔材	
0924	◇	丸材	64	3				散孔材	
0925	流木								
0926	線型(?)	板状	18	9				散孔材	
0927	流木								
0928	杭(?)	丸材	86	4				散孔材	
0929	杭	◇	19	3.5				散孔材	
0930	流木								
0931	◇								
0932	◇								
0933	◇								
0934	◇								
0935	◇								
0936	◇								
0937	◇								
0938	◇								
0939	杭	丸材	13	6				散孔材	
0940	◇	◇	32.5	3.5				散孔材	
0941	◇	◇	18	4				環孔材	
0942	◇	板状割材	17	6.5				環孔材	
0943	◇	角材	26	5	3.7			環孔材	
0944	流木								
900	◇								
901	◇								
902	杭	角材	22	6				環孔材	

2 弥生時代の調査

903	杭	板状割材	44	9.5	2	環孔材	
904							
905	流水						
906	環(?)		17.5	4		散孔材	カゴノキ
907	流水						
908	杭	丸材	35	5.5		散孔材	
909	流水						
910	*						
911	杭	丸材	46.5	6.5		環孔材	
912	*	*	38	6.5		散孔材	911と 接合可能
913	流水						
914	杭	丸材	34	6.5		環孔材	912と 接合可能
915	流水						
916							
917	流水						
918							
919	流水						
920	*						
921	杭	板状割材	36.5	7		環孔材	
922	流水						
923	*						
924	杭	丸材	38	4.5		環孔材	
925	流水						
926	杭	丸材	36.5	3.5		環孔材	
927	流水						
928	*						
929	*						
930	杭(?)	板状割材	13.5	4		環孔材	
931	杭	板状割材	25	8		環孔材	
932	*	丸材	27	4.5		散孔材	
933	*	*	47.5	7		環孔材	

934	杭	丸材	37	2.5		環孔材	
935	*	*	13	4.5		環孔材	
936	*		49	4		環孔材	
937	*	丸材	98	4		環孔材	
938	*	*	22.5	5		環孔材	
939	*	*	8	4		散孔材	
940	杭(?)	丸材(?)	16.5	3.5		環孔材	
941	*	丸材	14	3.5		環孔材	
942	杭					環孔材	
943	*					環孔材	
944	*	半割材	31	9		環孔材	
945	環(?)		24	4.5		環孔材	ハイノキ属
946	流水						
947	*						
948	*						
949	*						
950	*						
951	杭	板状割材	44	8		環孔材	
952	流水						
953	*						
954	杭	丸材	40	3.5		環孔材	
955	*	板状割材	61	14	3	環孔材	
956	*	*	22.5	7.5		環孔材	
957	*	丸材	37	4.5		環孔材	
958	*	板状割材 (?)	13	2		環孔材	
959	環(?)	不明					
960	杭	板状割材	21	9		環孔材	
961	*	*	76	14	2.5	環孔材	
962	*	*	60	7		環孔材	ツブラジ
963	杭(?)	丸材	53	3		環孔材	
964	杭	板状割材	56.5	10	3	環孔材	

III 調査の記録

965	杭	丸材	63.5	6.5	△	
966	杭(?)	板状割材	32	6	○ 環孔材	
967	杭	◇	9.5	4	○ 環孔材	
968	◇	角材	37	6.5	○ 環孔材	
969	流木					
970	杭(?)	板状割材	23	3.5	△	
971	流木					
972	杭	半割材	22	6.5	○ 散孔材	
973	流木					
974	杭(?)	板状割材	21	7	○ 散孔材	
975	流木					
976	◇					
977	◇					
978	◇					
979	杭	半割材	17	6	○ 環孔材	
980	流木					
981	杭	板状割材	15	12	○ 散孔材	
982	流木					
983	◇				○ 散孔材	
984	◇					
985	◇					
986	◇					
987	◇					
988	◇					
989	杭	丸材	48.5	4.5	○ 散孔材	
990	◇	角材	26	6	○ 環孔材	
991	◇	角材	26	6	○ 散孔材	
992	流木					
993	◇					
994	◇				○ 散孔材	
995	杭	角材	26	6.5	○ 散孔材	

1000	流木					
1001	杭	板状割材	48.5	18	4.5	○ 環孔材
1002	流木					
1003	◇					
1004	◇					
1005	◇					
1006	◇		53	17		
1007	杭	板状割材				○ 環孔材
1008	流木					
1009	◇					樹皮?
1010	◇					
1011	◇					
1012	◇					
1013	◇					
1014	◇					
1015	杭(?)	角材	22.5	5		○ 散孔材
1016	杭	丸材	51	8.5		○ 散孔材
1017	流木					
1018	◇					
1019	不明					
1020	流木					
1021	◇					
1022	◇					○ 散孔材

常の精製土器や底部 (01124・01114・01109・01137)、木葉痕底を有する01155などがある。

また壺底部では、二次的穿孔をもつ01313・01066があり、他に01051・01122とともに突帯文土器底部と考えられる01052もみられる。

木器 (Fig. 22・23, Pl. 26)

木器は図に示した以外に鋤状木器、槽破片、不明木器などがある。

木製腕輪 全周の1/3程の残片と考えられる。幅2.4cmで断面形は薄いD字形となる。厚さ9mm、内径9.4cm、外径11.4cmを計る。外面に黒漆塗布後に赤色顔料で重ね塗る。

三又楯・槽 (2000・341) 2000は、頭部幅15.2cm、全長32cmを計る。正面柄孔径4.7、裏面柄孔径4.3cmである。最大厚3cmであり、若柄角度は約70度となる三又楯である。刃部は段々に長さ異なる。また裏面の柄孔周辺に削りが丁寧である。

槽 (341) は、器小口部の断片である。現存長34.7cm、幅7~7.4cm、厚さ3.8~5.6cmの残片となっている。現存では深さ3cm程度を計る。小口部上端には細かな削りがみられる。

SD 16b 溝 (Fig. 24・25, PL. 12)

SD 16b 溝は、調査区南西隅で検出した。溝東岸のみの調査であったが延長8mを計る。本溝はSD 16溝(弥生前期)東岸の延長上にあたり、未調査区12m程をはさむが明らかに同一の流れと判断できる。

ここで本溝の堆積をみてみることにする(Fig. 4)。

南壁では、立あがり壁をSD 01溝に切れ失っているが、最上層(層厚25cm)は灰褐色シルト、第2層(層厚20cm)一灰黒色粗砂、第3層(層厚50~80cm)一黒褐色シルト(有機層多し)、第4層(層厚30~40cm)一灰黄色粗砂、第5層(層厚40cm)一黄褐色粗砂~砂礫、それから第6層は西端部に僅かに窺く黒褐色粘土である。壁面は上端で灰黄褐色粘質シルト(標高20.9m)であり、下層が暗紫灰色粘土、この下層が青灰色粘土(標高20.3m)となる。

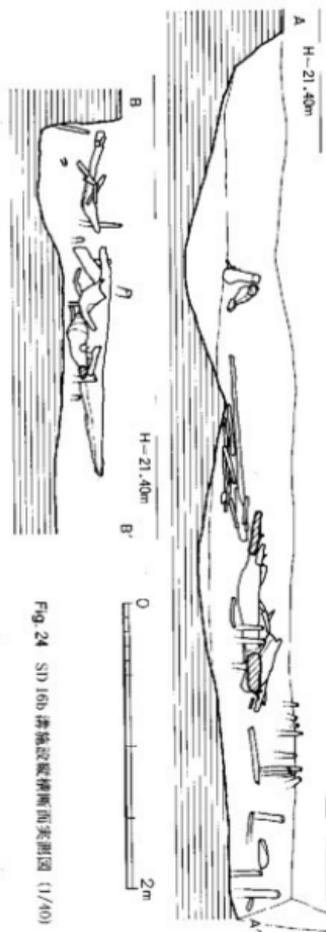


Fig. 24 SD 16b 溝横断断面西側面図 (1/40)

III 調査の記録

本溝では、SD 16溝と同様に流木および丸杭を使用した杭列遺構がみられる。これは東岸より西へ2 m程のところで縁辺に平行して径3～5 cmの丸杭使用の杭列(延長4 m)がみられ、枝木について径30 cm程の大型木材をとめている箇所もみられる。また南端ではこの杭列と直交する一条の杭列が確認できる。これら杭・流木の樹種については次表にまとめたが、構成については後に述べる。

これら施設は護岸に関連するものであろうか。SD 16溝西岸部施設と共通する内容を持っている。

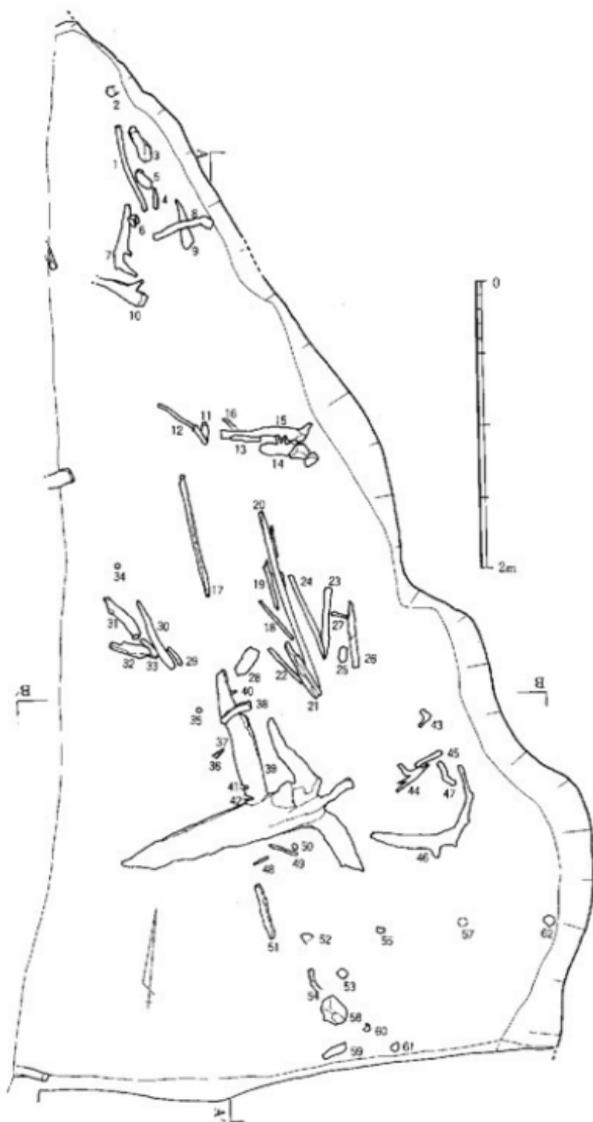


Fig. 25 SD 16b 溝施設・流木出土状況実測図 (1/40)

3 古墳時代の調査

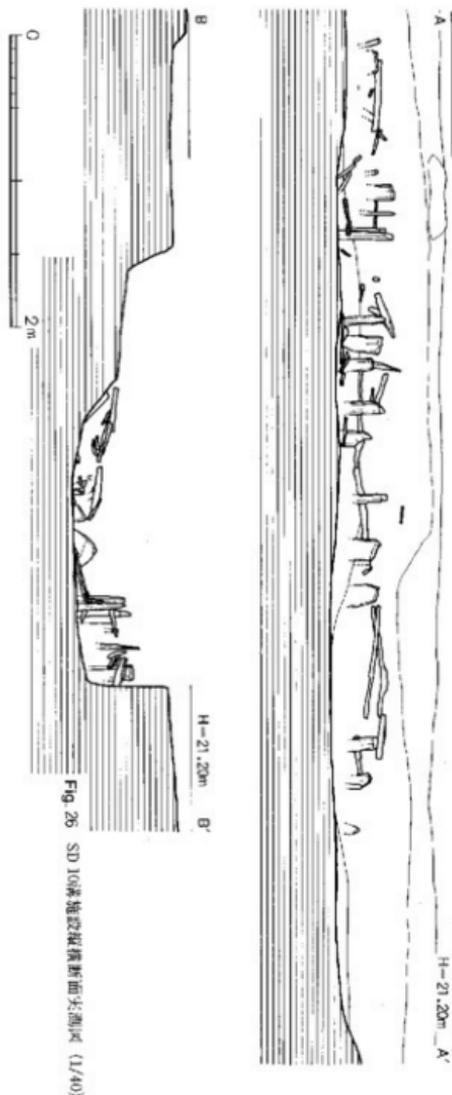
概要 明確に古墳時代の所産と考えられる遺構は調査区西側に検出されたSD 10溝のみである。SD 10溝は弥生時代前期溝SD 16溝の流路と重複する部分があり、南へ蛇行する。流路北側では流木の他に底面に板状割材・丸杭などを流路両側に打ち並べている。溝に伴う遺物は若干量であり、須恵器・木製品などが出土した。

SD 10溝 (Fig. 26~29, PL. 4・6)

本溝は北側部分でSD 16溝(弥生前期)の流路と重複し、調査区南側で西に「く」字形に近く屈曲しながら更に南へ蛇行する。溝は延長25m、幅は北側で5.5m、南側で3.5~2m程となる。溝は北側の東岸では段状となり、他の部分も縁辺部の出回りの多い形状となる。溝に付属する施設としては北端部より延長7.5m程まで矢板・丸杭の杭列がある。これは溝下端線に沿い東・西に並行して打たれる。特に西側では矢板を多用している (Fig. 26・27)

この施設は、周辺部では溝底に流木群が流れの方向に堆積しているのみで他に関連するものもみられない点で本来護岸を目的とすると考えられる。

遺構埋土からは、南端部の最下層より須恵器 坏身 2点、北端部で手摺ね土器、弥生式土器、木製品が出土したが、全体に遺物量は少なく、出土須恵器が



III 調査の記録

本溝の時期を示すものである。

土層 (Fig. 4)

本溝は前述の様に地点によって形状が非常に異なり、大きくは南側では幅が狭少であり、北に従って幅ひろく緩慢な流れとなるものと考えられる。南端部壁および北端部壁の各土層について見ることにする。

南壁では、溝幅員は2.6m、深さ80cm程で、断面形は緩いV字形をなしている。溝上端面は本調査区での層序に通有な第Ⅲ層(黒～黒褐色シルト)下にある暗灰褐色シルト(中～粗砂混)層下面にある。埋土は2層であり、上層に黒褐色シルト(下層より赤味がつよく、層厚10～20cm)、下層はほぼ同色の黒褐色シルト(中砂のブロックを多く含み、層厚50cm)となる。また下層には若干の有機物が混在する。

次に北壁では溝は断面形が肩部の立あがりの緩い皿状となる。南壁に比較して第Ⅱ層(床土)以下の堆積に変化があり、西側の溝上端部は第Ⅱ層下面まで伸びているがこれも南壁と相異するところである。埋土は2層に区別される。上層は灰褐色砂質土で、10cm程の薄層である。層中に多くの粗砂を混入する。下層は黒色有機質土であり、層厚20～40cmをはかる。溝底は西側への傾斜がつよい。

溝に伴う主要な施設 (Fig. 26・27)

施設は前述の様に溝下端線に沿い東西に並行して板状割板(矢板)・丸杭を打つもので護岸の用途と考えられる。

使用材は、比較的小型(径10cm内外)の木材の先端のみを尖らした丸木杭(丸材)と大型木材の割材とがあり、数的には丸木杭27本、割材利用杭26本があって、後者は西岸側に使用頻度が高い。

なお施設構築に利用した木材および流木、木製品などの樹種については、時間的制約のために施設使用木材・流木は針・広葉樹の区別のみとし、木器については樹種同定を行った。結果は次表に示す。(Tab. 3)

出土遺物 (Fig. 28・29)

土器 (Fig. 28) 図化可能な土器類は图中4点が殆ど全てである。

須恵器 (01043・01042) 01043は立あがり部が低く内傾する小型坏身である。立あがり部は蓋受け部より僅かに高いだけであり、外面に灰を被る点で坏蓋である可能性もある。器色は外面が灰白色、内面黒灰色を呈する。調整は内外面ともに丁寧な横ナデである。胎土に若干粗砂を混入する。焼成堅緻。口径12.2cmを計る。01042は底部の平坦化がみられる坏身である。口径に比較して器高が低く、蓋受けと立あがり部との境が明瞭でない。体部の下半に回転ヘラ削りを加え、外底部はナデが残る。軸回転は逆時計まわりである。外面体部上半より内面は全て横ナデ調整である。器色暗灰色を呈し、焼成は堅緻である。口径12cm、器高4cmを計る。

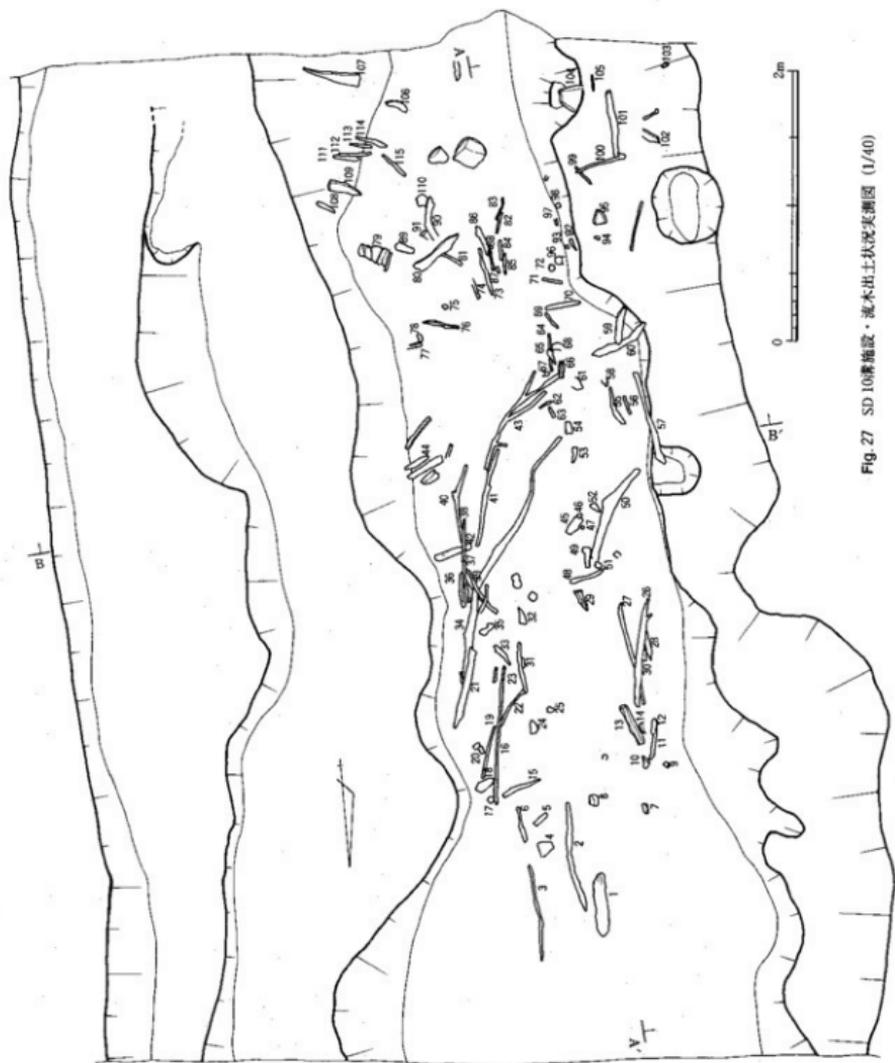


Fig. 27 SD 10簡縮設・流木出土状況実測図 (1/40)

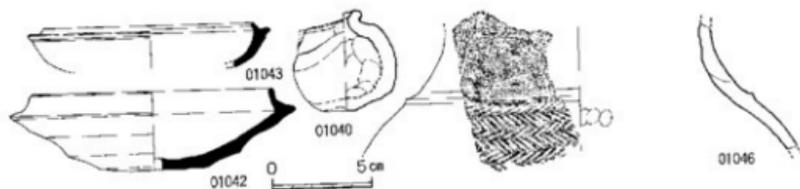


Fig. 28 SD 10溝出土遺物実測図(1) (1/3)

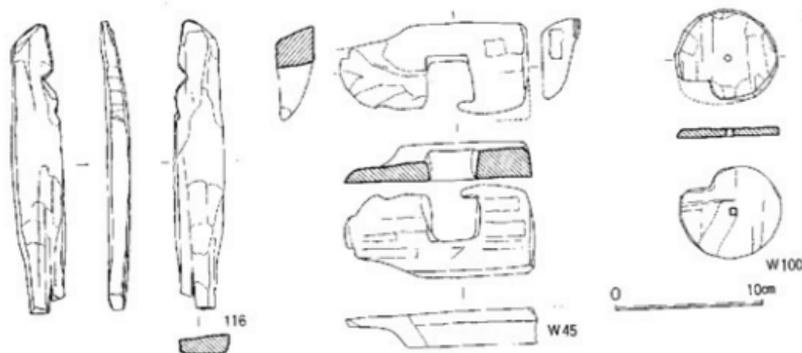


Fig. 29 SD 10溝出土遺物実測図(2) (1/4)

土師器 (01040) 01040は、壺形の手捏ね土器である。粘土塊より内面をたくじってつくる。全体に磨滅がいちじるしく、外面淡褐色、内面黒灰色を呈する。外面の一部に黒斑あり。器高5.1cm、胴部最大幅5.25cmを計り、口縁一部を破損する。

弥生式土器 (01046) 01046は遺構の時期との関連はない。頸部下端に低いつまみ出しの突帯1条を廻らし、この下に貝殻腹縁によると思われる無輪羽状文を施す。また頸部に3本単位による山形文(?)がみられる。胎土、焼成ともに良好である。頸部径17.8cmである。

木器 (Fig. 29) 木器は定形化したものは殆どみられず、以下の3点のみである。

NO. 116は板状材の一端を欠くが、他の一端を嘴状に仕上げ、先端より3.8cmと6cm程下った位置に各々幅1.6cm、0.9cmのV字形抉りを施している。この側面部分を主として内外面には表面をととのえるためにタテ方向の削りが痕跡的に残る。残存長19.7cm、幅3.4cm、厚さ1.2cm程度を計る。

W45は、厚さ2.5cm程の板材に一辺が3cm程の柄状穴を穿った木器である。岡中右短辺は5.5cm程で端部は旧状を保つものである。全体に表面の破損が著しく器種を限定し得ないが、建築材の一部である可能性もある。残存長12.8cmをはかる。

目 調 査 の 記 録

Tab. 3 SD 10湧出土木材観察表

番号	器種	加工法	法量 (cm)			器種	備 考
			長	幅	厚		
1	枕(?)		10	5.5			
2	流木						
3	◇						
4	枕	板状割材	53	9		環孔材	
5	◇	丸材	17	4		散孔材	
6	流木						
7	枕	板状割材	27	9		環孔材	
8	◇	角材	14	6		環孔材	
9							
10	枕	板状割材	38	9		環孔材	
11	枕(?)		18	3.5		散孔材	
12	不明		10.5	4.5		散孔材	
13	流木						
14	枕	板状割材	46	7		環孔材	
15	流木						
16	◇						
17	枕	丸材	57	4		散孔材	
18	流木						
19	◇						
20	流木						
21	枕	丸材	67.5	6		散孔材	
22	流木						
23	枕(?)	丸材	14.5	3		散孔材	
24	枕	角材				環孔材	
25	枕	丸材	19	4.5		散孔材	
26	流木		13	9			
27	◇						
28	◇(枕?)	板状割材(?)	30	9		散孔材	
29	枕	板状割材	28	16	4	環孔材	
30	◇	半割材	38	10		散孔材	
31	枕(?)	板状割材(?)	23	5		環孔材	
32	枕	板状割材	28	10		環孔材	
33	流木						
34	◇						
35	枕	丸材	50	4		散孔材	
36	流木						
37	◇						
38	◇						
39	◇						
40	流木						
41	◇						
42	枕(?)	丸材	26	5		散孔材	
43	流木						
44	◇						
45	木製品		13	6.5	2.5	散孔材	カシ
46	枕	板状割材	30	8		環孔材	
47	◇	丸材	10.5	3		環孔材	
48	流木						
49	枕	板状割材	30	8		環孔材	
50	流木						
51	枕	角材	38.5	5	4.5	環孔材	
52	◇	◇	10	6		環孔材	
53	◇	板状割材	26	10		環孔材	
54	◇	◇	38.5	9	4.2	環孔材	
55	流木	丸材					
56	◇						
57	◇						
58	枕(?)	丸材	50	3		散孔材	

3 古墳時代の調査

59	流木							
60	杭	丸材	14.5	3			散孔材	
61	◇	板状割材	64	8	7		環孔材	
62	流木							
63	◇							
64	◇							
65	◇						散孔材	
66	杭	板状割材	27.5	19.5	2.3		環孔材	
67	◇	丸材	16	5			散孔材	
68	◇	◇	50	4.5			散孔材	
69	流木							
70	◇							
71	◇							
72	杭	角材	39.5	6.5	4.5		環孔材	
73	流木						環孔材	
74	◇							
75	杭	丸材	33	3			散孔材	
76	流木							
77	◇							
78	杭	丸材	45	3			散孔材	
79	杭(?)	板状割材	42	13			環孔材	
80	流木(?)							
81	流木							
82	◇							
83								
84	流木							
85	杭	丸材	21.5	4			散孔材	
86	流木							
87	◇		7	3			環孔材	
88	杭	丸材	27	3			散孔材	
89	杭(?)	◇	55	6			散孔材	

90	流木							環孔材
91	杭	板状割材	36.5	10	3.5			環孔材
92	流木							
93	杭	丸材	26	4				環孔材
94	◇	◇	25.5	3.5				散孔材
95	◇	板状割材	50	12	7			環孔材
96	◇	丸材	5	7.3				散孔材
97	◇	板状割材	11	4.5				環孔材
98	◇	丸材	9	2.5				
99	流木							
100	流木							
101	杭	丸材	54	4.5				環孔材
102	◇	◇	22	7.5				散孔材
103	◇	◇	21.5	3.5				散孔材
104	◇	板状割材	23	17	3.5			環孔材
105	◇	◇	39	16	1.8			環孔材
106	流木							
107	杭	板状割材	34.5	8				散孔材
108	◇	◇	53	12.5	3			環孔材
109	◇	◇	91	18	3			環孔材
110	流木							
111	◇							
112								
113	杭	丸材	52	2.5				散孔材

III 調査の記録

W100は、厚さ5～6mm程の板材を径7cm程の円形に仕上げ、中央に径4mm程の一孔を穿っている。縁辺部の仕上げは片面のみを長さ1～1.5cm程の削りである。また中心部の面の整形は縁辺調整後に工具を時計回りに回転させて行っている。北端部黒褐色砂質粘土(下層)出土。

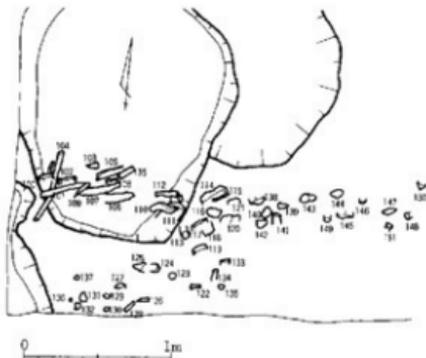


Fig. 30 SD 19 溝施設出土状況平面実測図 (1/40)

4 歴史時代の調査

概要 古墳時代に続く遺構は溝、土壌である。埋土より若干ながら時期決定の手掛かりとなる遺物の出土した遺構は溝3状 (SD 0208・17) と土壌1基 (SK 06) である。他に溝11条 (SD 03・06・07・09・11～15・18・19) と土壌2基 (SK 04・05) があり、本項ではこれについても略述したい。

溝遺構 (Fig. 30～33)

SD 02溝 (Fig. 3) 調査区北東部より南西部に「S」字状に蛇行する溝である。直線にして延長50m、幅は0.5～3mと変移が大きい。特に中央部では幅員の大きいものとなる。埋土は地点により幾分異なるが、中央部断面 (Fig. 32) では殆どが粗砂で占められ、やや西側のSD 08溝との重複部では底面近くに粘質土の堆積する状況を示している。(Fig. 31)

出土遺物 (Fig. 33-01001・01003・01004・01005) **01001**は、土師器坏である。器色は内外面ともに淡黄褐色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。外面の荒れが著しく、内面ヨコナデである。**01003**は、鉢形土器である。外面および口縁内面に煤附着する。外面下半に縦刷毛目を残し、胴部内面は横のヘラ削りで、他は横ナデである。胎土は粗砂の混入多く、粗である。焼成堅緻。**01004**も鉢形土器である。外面および口縁部内面に煤附着する。胴部内面がヘラ削りである以外は全て横ナデである。胎土は粗砂の混入多く、焼成は堅緻である。**01006**も同様な鉢形土器であるが内面胴部と口縁部との境に鋭い稜を有する。外

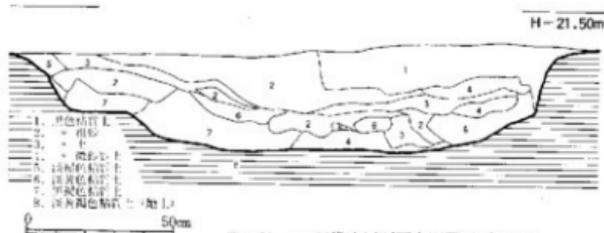


Fig. 31 SD 02 溝土層断面実測図(1) (1/40)

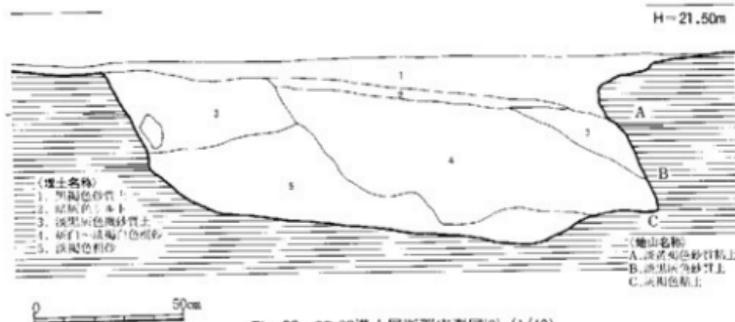


Fig. 32 SD 02溝土層断面実測図② (1/40)

面胴部に細かい縦刷毛目調整、内面胴部は左あがりのへら削りであり、他は全て横ナデする。器色は内面褐色で、外面に煤付着する。胎土密で焼成堅緻である。

SD 08溝 (Fig. 3) 調査区中央でSD 02溝と重複して北西方向に延びる溝で、縁辺部の出廻りの多い不規則な形状をなす。延長35m程が確認され、幅は0.75~2.5mと変化する。溝埋土は黒色砂質土の単一層であり、遺物は固化に耐えない小破片が出土したにとどまった。

出土遺物 (Fig. 33-01037) 01037は糸切り底をもつ土師皿である。小破片のため径は不詳である。器色は淡褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

SD 17溝 (Fig. 3) 調査区北東部に一部を検出した。南北幅6m、東西長3m程が確認できるが、小範囲のため溝の方向、性格についても不明である。埋土は暗褐色砂質土で若干の遺物が出土した。

出土遺物 (Fig. 33-01163・01166・01167) 01163は高台付土師皿である。高台は細身で高く、外側にふんばる。器色は内外面ともに淡黄灰色を呈し、坏底部外端は削り状となる。他は全て回転ナデである。胎土は非常に密で、焼成はやや軟質である。口径16.2cm、底部9cm、器高4cmをはかる。01166は低い外開きの高台を有する須恵器坏である。体部は外方に向かって直線的に開く。器色は暗灰色を呈し、調整は内外面ともに横ナデである。内底部に渠(?)痕跡が残る。胎土は密で、焼成堅緻である。口径15.2cm、底径8cm、器高5.5cmを計る。01167も同様の形態となる須恵器坏であろう。器色は淡灰色を呈し、内外面ともに回転ナデ調整を加える。胎土密で、焼成堅緻である。口径14.2cmを計る。

これら須恵器は8C末を前後するものであろう。

以上は溝の時期比定が可能なおもであったが以下では時期不詳な溝について略述したい。

SD 03溝 (Fig. 3) 調査区南西端に延長5.5m、幅0.5mの規模で検出した。床土下面に上端があり、埋土は灰褐色シルトである。深さ20cm弱である。

Ⅲ 調査の記録

SD 06溝 (Fig. 3) 調査区中央部南半に始まり、南西に伸び立ちあがる溝で、延長17m、幅1m程度の規模である。埋土は暗褐色粘質砂土である。

SD 07溝 (Fig. 3) SD 02溝の東側で見付かった小溝で南北長9.5m、幅0.5m程を計る。埋土は暗灰色粗砂である。

SD 09溝 (Fig. 3) SD 08溝に直交して西側に延びる小溝で、延長10m、幅40cm程を計る。SD 15溝とは規模的にも同種で平行関係にある。

SD 11溝 (Fig. 3) 調査区西端部を北東から南西に走る。延長15m、幅75cmを計る。埋土は灰色シルトである。

SD 12溝 (Fig. 3) SD 11溝の東に平行する小溝で延長6m、幅50cmを計る。埋土は灰色シルトである。

SD 13・14溝 (Fig. 3) 調査区西端部で東西に平行する溝である。延長は5～6m、幅50～60cmで、1.5mの間隔を保つ。深さは非常に浅く、埋土は灰色シルトである。

SD 15溝 (Fig. 3) SD 08溝北側でこれと直交し、北東・南西部に延びる小溝である。南側のSD 09溝とは11mの間隔がある。水田区画との関連も考えられよう。

SD 18溝 (Fig. 3) SD 11溝以前の溝でSD 10溝に重複する。略々東西方向に走り、延長5m、幅70cm程を計る。埋土は黒褐色シルトである。

SD 19溝 (Fig. 3・30) 調査区西側の南西隅で検出した。北側部分が円形に窪み、これと交わる様に矢板が多く打たれており、東西方向に延びる。何らかの水利施設と考えられるが詳細については判らない。出土木材については別表 (Tab. 4) にまとめた。

以上、時期不詳のものも含めて溝遺構についてみて来たが、SD 02溝は一応平安時代の初期に納まるものであろう。更にSD 08溝は糸切り土師皿1点であるので鎌倉以降のいつの時期か

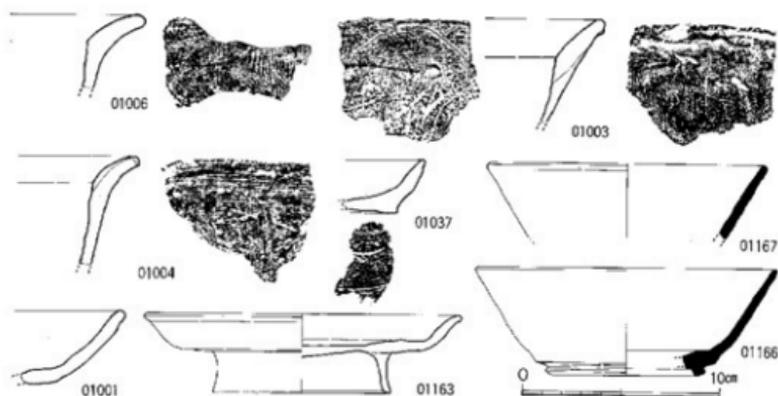


Fig. 33 SD 02・08・17溝出土遺物実測図 (1/3)

4 歴史時代の調査

Tab. 4 SD 19溝出土木材鑑別表

番号	器種	加工法	法量 (cm)			樹種	備考
			長	幅	厚		
100	杭	板状割材	33	10		環孔材	Fig.
101	杭	丸材	64	5		環孔材	
102	杭	板状割材	26	6.5		環孔材	
103	枕	角材	47	6.5		環孔材	
104	杭	板状割材	22	4.5		環孔材	
105	枕	*	27.5	5.5		環孔材	
106	*	丸材	64	5.0			
107	*	板状割材	53	9.3		環孔材	
108	*	*	58.5	9.5		環孔材	
109	*	半割材	22	4.5		環孔材	
110	*	板状割材	19	10		散孔材	
111	*	*	43	11.5		環孔材	
112	*	*	50	17		環孔材	
113	*	丸材	32	4		散孔材	
114	*	板状割材	47.5	13		環孔材	
115	*	*	14.5	8.5		環孔材	
116	*	丸材	31.5	4.0		散孔材	
117	*	板状割材	37	9		環孔材	
118	*	丸材	38	6.5		散孔材	
119	杭	半割材	27	9.0		環孔材	
120	*	板状割材	33	11		環孔材	
121	*	*	46.5	7.5		環孔材	
122	*	*	39.5	10.5		環孔材	
123	*	半割材	34	6.5		環孔材	
124						散孔材	
125	杭	板状割材	14	7.5		散孔材	
126	*	*	35	6.0		環孔材	
127	*	半割材	31.5	6.5		環孔材	
128	流木						
129	杭	丸材	27.5	4		環孔材	
130	*	丸材(?)	60	-			
131	*	半割材	37	6		散孔材	
132	*	丸材	41	4.5		環孔材	
133	*	板状割材	6	6		環孔材	
134	流木	-	19	5			
135	杭	半割材	31	3.5		環孔材	
136	*	丸材	18	2.5		散孔材	
137	*(?)	*	19.5	2		散孔材	
138	枕	板状割材	44	10.5		環孔材	
139	枕	角材	34	4.5		環孔材	
140	*	板状割材	23.5	5.5		環孔材	
141	*	*	43.5	8		環孔材	
142	*	*	32.5	8		環孔材	
143	*	*	25	9.5		環孔材	
144	*	*	18	8		環孔材	
145	*	*	27.5	11		環孔材	
146	*	*	17.5	4		環孔材	
147	*	*	15	7.5		環孔材	
148	*	*	32	6.5		環孔材	
149	*	丸材	18	2.5		散孔材	
150	流木	-					
151	杭	丸材	14	3		散孔材	

III 調査の記録

は不詳であるが、SD 09・15溝とが本溝と直交し、水田区画と水路の関係と考え得るのであれば、調査区東南部で検出した水田址に伴う可能性のある土師皿 (Fig. 38-01179) から下限を室町期までと考えることもできよう。またSD 17溝はこれの南方17m程に位置するSK 06 (井戸) と関連するものと考えて良からう。

他の遺構溝についても水田経営を主とする生産遺跡に伴うものが多くあると考えられ、特に調査区北側の隣接地はこの課題を明らかにするために将来的調査が必要である。

土壇 (Fig. 34~37, PL. 13)

土壇は数的に少ないので番号順に述べる。

SK 04土壇 (Fig. 34) 本土壇は、調査区西側のSD 05溝とSD 16溝の間に位置し、試験時のトレンチで切られ、ほぼ東半分を残す。形態は円形で、規模が1.6×1.8m程度となるものと考えられ、深さ20cmを残す。埋土は暗灰褐色砂質土であり、遺物は全く出土しなかった。

SK 05土壇 (Fig. 36・37 PL. 13) 本土壇は調査区東端中央部に位置する。水田址調査後に耕作土を除去して見付かった。

土壇は、大きく平面的に二段掘りとなる。形態的には隅丸長方形に近い外側プランは、東西1.7m、南北1.43mを計る。また内側のプランは外側の東西プランに対し南北に長い長方形をとる。南北95cm、東西80cmを計り、四隅部は方柱状の杭痕跡が明瞭である。内側プランの中央は60×70cm程の不整形の窪みが認められ、底面および壁面は自然礫層となる。深さは1.1mを残す。調査時には礫層より若干の湧水がみられた。

土層 (Fig. 36) 埋土は比較的単純であり、埋積順序から第4層-淡灰褐色粘質粘質土に黒色粘質土ブロック混、第3層-黒色粘質土 (焼土塊混)、第2層-淡黒褐色粘質土、第1層-黒灰色粘質土 (粗砂を多く混入) となり、使用時期下限を示す土器類は第1層で殆ど出土した。また地山面IV層 (礫層) は、海拔標20.9m付近にある。

出土々器 (Fig. 37-01168・01169・01170・01171)

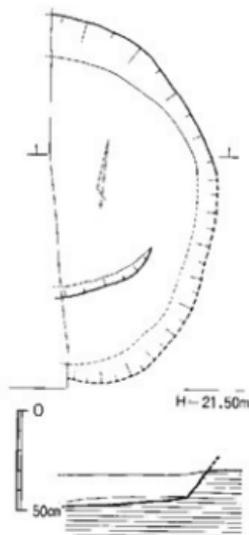


Fig. 34 SK 04土壇出土状況実測図 (1/30)

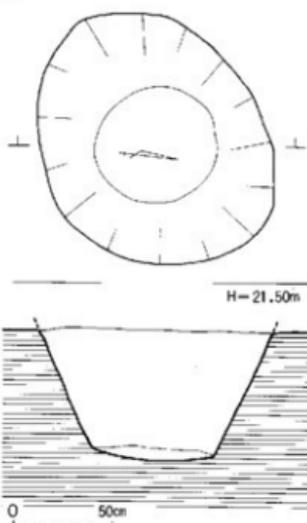


Fig. 35 SK 06土壇出土状況実測図 (1/30)

本土曠から出土した土器類で岡化に耐え得るのは土師器甕、同環、緑釉陶器皿など少数である。

01168は、口縁部がく字に屈曲して外方に開く土師器甕である。外面全体に煤が付着する。調整は、外面胴部は粗雑な縦刷毛目で、口縁外面は横ナデを施す。また口縁内面は非常に細かい横刷毛目で、胴部は右あがりの荒いヘラ削りを施す。器色は暗褐色～暗赤褐色を呈し、胎土やや粗である。焼成堅緻。口径28.2cm、残存高13.8cmを計る。

01169は、緑釉陶器皿か。口縁端部は僅かに外方につまみ出される。釉の剥落が大きいが口縁端部から内面にかけて淡緑色釉がのこる。胎土は褐色をおびた白色で非常に精良である。焼成は軟質である。

01171も緑釉陶器である。埴形をなし、底部付近以下を欠失する。口縁はゆるやかに外方に引出され、端部はやや肥厚する。釉は洗浄の際に全て剥落した。胎土・焼成とも01169に同じである。口径は12.4cmを計る。

01170は、土師器高台付坏である。内外面ともに強いヘラミガキ調整を加える。器色は外面で淡黄灰色、内面淡褐色である。胎土は非常に密で、焼成堅緻である。坏底部径10cm程である。

以上の出土遺物より本土曠は8C末を前後する時期と考えられ、性格的には井戸と考えて良いと思われる。

SK 06土曠 (Fig. 35) 調査区西側南西隅で検出した。形態は東西に長い円形をなし、長径1.4m、短径1.14m、深さ57cm程を残す。底面はほぼ平坦である。埋土は粗砂ブロックを含む暗灰色シルトであった。埋土より遺物の出土は全くなく、時期、性格ともに不詳である。

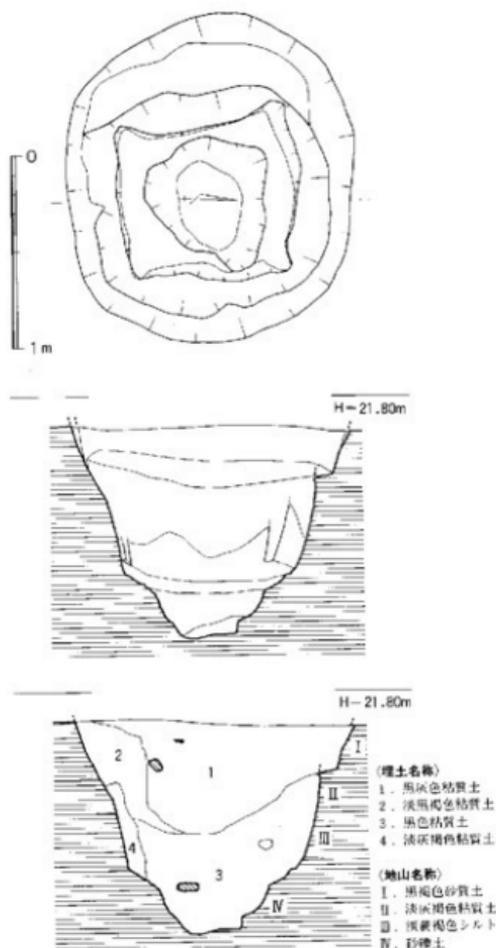


Fig. 36 SK 051 掘出土状況実測図 (1/30)

Ⅱ 調査の記録

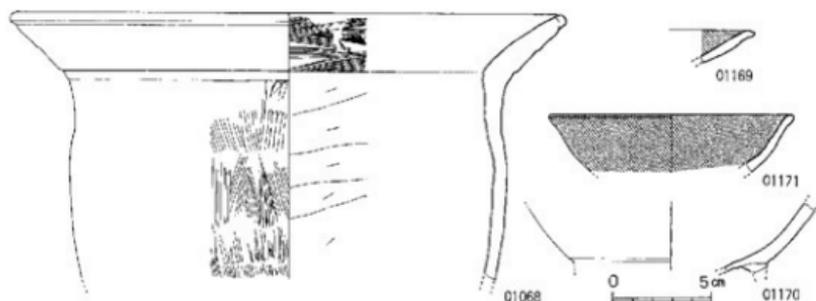


Fig. 37 SK 05-1:横出土遺物実測図 (1/3)

5 調査区出土の遺物 (Fig. 38)

調査区区域内では、東半部を中心として平安時代以降の須恵器、土師器が細片ながら出土している。また弥生式土器は西半部に比較的多く採集され、特にSD 04・05溝の東側一帯にまとまっていた。

01176は、小さい平坦口縁を有する鉢口縁部である。瓦質で内外面ともに横刷毛目後にナデ調整を残す。外面に煤付着。器色は外面淡黒褐色、内面褐色を呈する。胎土に径1~4mmの砂を多く含み、焼成堅緻である。復原口径31.4cmを計る。01178は土師器小皿である。体部中央がぼろぼろ。器色は内外面ともに淡黒灰色を呈する。器面調整は内外ともにナデであり、底部は糸切り離しである。胎土は精良で、焼成も堅緻である。復原口径11cm、器高2.3cmを計る。

01179は、底部径に比較して体部外開度の大きい土師器小皿である。口縁端部内面に一部横刷毛目を残す以外は全て横ナデ調整を施す。器色は淡赤褐色で、胎土、焼成ともに良好である。口径14.8cm、器高3cmを計る。01174は、外面に荒いタタキを有する鉢口縁部破片である。器色は淡赤褐色を呈し、外面胴部に荒いタタキを施し、口縁端部は横ナデである。また口縁内面は横刷毛目調整後に横ナデを施し、胴部との境は緩い緩を有する。また胴部はへら削り調整である。焼成堅緻である。

01185は低い高台を有する坏である。高台は2mmと非常に小さい。坏底部端との境は不明瞭で、体部は内湾気味に立あがる。器色は灰色を呈し、胎土に径1mm程度の砂粒を若干混入する。焼成は堅緻である。底部径6.6cmを計る。01186は同様に坏底部端と高台部の境の不明瞭な坏である。高台部は高さ4.5mm、受付部幅3.5mmを計る。坏部は口縁部を欠失するがその立あがりはやや緩いものとなろう。器色は淡青灰色を呈する。胎土に径1mm程の砂粒を若干含み、焼成は堅緻で

ある。底部径6.6cmを計る。

01182は、外端部がやや垂れる平坦口縁を有する甕で、直下に2条のヘラ描き沈線を施す。器色は灰褐色を呈し、焼成堅緻である。口径20.8cm。01117は、口縁部が内傾してく字形におられる甕で外面縦刷毛目調整を施す。器色淡褐色を呈する。口径5.8cm。01180は分厚い上底をもつ堯底部で、外面縦刷毛目調整。器色は外面赤褐色、内面暗褐色を呈する。底部径9.4cm。01175は小型甕底部である。外面ヘラミガキ、内面刷毛目後ナデ調整。器色は灰褐色を呈する。底部径5cmを計る。弥生中期初頭～前半代の所産である。

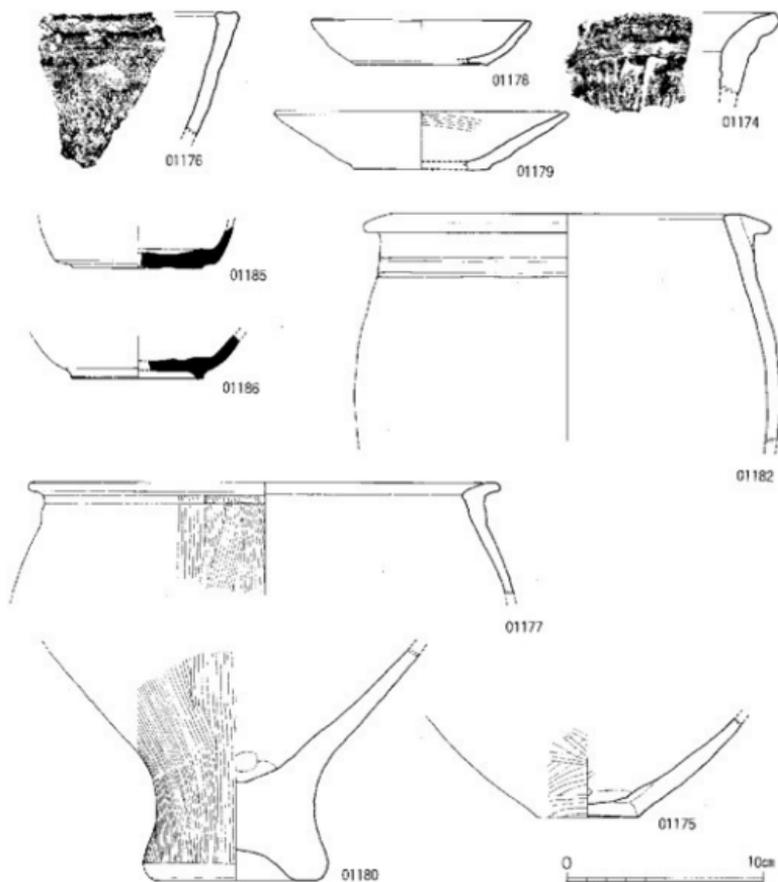


Fig. 38 調査区出土遺物実測図 (1/3)

Ⅳ おわりに

これまで第22次調査で検出した各時代の遺構・遺物について述べて来たが、広大で複雑な沖積地遺跡である四箇遺跡群では今回の調査でも僅かな部分のみ明らかになったにすぎない。

以下では第22次調査成果を中心として四箇遺跡群における各時代遺構・遺物の分布を述べ、簡単なまとめをしたい。

縄文時代調査は、調査区南半を主として略々1000㎡程の包含層調査を行い、不整形土壇3基(SK 01-03)および遺物群を検出した。土器およびこれに伴う石器群分布はこれら土壇を中心として南～西側に濃密であるが住居址などの確実な生活遺構は無く、この様な遺構群は更に南側に分布範囲があるものと考えられる。

出土した遺物のうち土器群は前述の様にⅤ類に区別されるが、管畑式土器および比較的小形で整然とした条痕文を地文とする縄文時代前期と考えられる深鉢形土器とともに第Ⅰ～Ⅲ類土器も混在状態で出土している。

第Ⅰ類土器は「キャリバー形の深鉢で、口縁部はゆるやかに内弯しながら開き、胴部は肩にわずかな張りをもっている。底部の平面形は、五角形または四角形となるため、器体自体も胴部の下端近くでは五角形あるいは四角形となる。口縁部が大きな波状をなすものや、酒杯状突起のつくものが多い。文様は全面に堅い横線で纏った縄文を施し、低い突帯を貼付け、突帯上に爪形文を施すものが多い。口縁部の内面にかすかな稜があり、稜の上位に縄文を施す。口唇部に爪形文を施しているものが多い」とされる鷹島式土器と器形・施文法なども類似している同土器は、その分布が広島～長野・神奈川県地方にあり、中期初頭の時期に編年されているが、西日本特に九州地方ではその発見は少ない。鷹島式土器に続く船元式土器(中期中葉)の分布は更に九州東半部を中心として発見遺跡数が増加し、九州西半部での阿高式土器の分布と拮抗しているが、瀬戸内系土器の流入は各期を通じてみられる。鷹島式土器のまとまった発見は最近長崎県百花台遺跡であった。

また第Ⅲ類土器は口縁部直下に貝殻腹縁による縦の刺突を加え、この下部に同施文具による刺突による横沈線を施すもので、薄手の深鉢形土器である。地文には細かい条痕文を施しており、貝殻文系統土器の多い南九州地方土器の可能性が高いのではなかろうか。

次に出土土器類に伴う石器類について見ることにする。

出土石器類は縄文時代の項で個別に述べたが、縄文時代中期包含層において確実に共存すると考えられるのは石鏃9点(01407・01401・01403・00034・01406・00331・00166・00297)およびスクレイパー類4点(01308・01310・01534・00631)・磨製石斧2点(01309・01307)などである。

石鏃は漆黒色黒曜石（伊万里腰岳産）および乳白色黒曜石（大分県姫島産）の二種類の黒曜石とサヌカイト製のものとがある。石鏃は00331の様に側辺部を鋸歯状に仕あげる特徴的なものもあるが、他の資料は殆どが基部の腸決りの大きい楕形鏃である。また姫島産黒曜石製のものは若干腸決りが弱い。

次にスクレイパー類では摘みのつく所謂石匙の横型のものや横長薄片利用のサイドスクレイパーがあり、何れもサヌカイト製である。

石斧は何れも磨製で残片ながら蛇紋岩・玄武岩を使用した製品で、尖頭鋸月型のものとなる。他に花崗岩転稜利用の磨石も共伴石器と考えて良い。

四箇遺跡群ではこれまでの調査で縄文時代前期・後期・晩期の遺構・遺物が数多く出土しているが中期に限ってはこれらが少なく、空白部となっていた。今回第22次調査では中期中期初頭期を埋める土器群と石器組成が明らかとなったが、本遺跡群の北側500m程にある田村遺跡群第5次調査（田村小学校建設地内調査）においては縄文時代前期末・同中期中葉の瀬戸内系土器群が出土し、この地域の縄文時代前～中期の土器変遷を辿ることが出来るようになってきた。併しこれらも共伴石器が明確ではなく、同時期九州系在地土器との関係を含めて追究されるべき課題は多い。

弥生時代では、前期後半～中期初頭に亘る溝遺構4条が検出遺構の全てである。前期後半代の自然流路であるSD 16・16b溝は前期末までの土器を含み、ほぼこの時期で埋積が終わっている。今次調査のSD 16溝は護岸を主と考えられる施設が西岸部を中心に構築されているが、引続いて行われた第23次調査（北側隣接）では本溝に相当する溝遺構は直線的に延びることなく西側に迂回しており、更に北西側に流路をとっている。この北西側へ流路をとる溝遺構は西岸が確認されていないが流路と交叉する東西方向に環状遺構をともない生産遺構の一端であると考えられる。同時期の溝遺構は第23次調査では更に小溝2条が見付かっている。SD 16溝は第23次調査区西側の状況から本来の主流となる溝遺構（河川）ではなく一つの小支流であると考えられる。また中期初頭の溝遺構は3条（SD 01・04・05）あるが、本調査区ではその機能は十分明らかにし難い。併し第23次調査区では前述の前期溝に伴う環状遺構の南側にこれと重複して中期初頭の環状遺構があり、第22次調査区の溝遺構もまた生産遺構と関連するものと思われる。

弥生時代溝遺構では前記の様に護岸施設や流木および木製品が数多く出土しているが、これらに使用された樹種については流木を除く杭・木製品について同定を行った。併し資料が多数に亘り、杭材の同定は針・広葉樹の区別にとどめざるを得なかった。

SD 16溝では、杭材（九杭・矢板）283点のうち針葉樹6点、広葉樹277点の構成であり、更に広葉樹では環孔材130点、散孔材126点、放射孔材21点の構成となっている。材使用には圧倒的に広葉樹の使用が多いことが判る。木製品では図示した櫓（341）がゴンズイ、三叉楸（2000）

Ⅳ おわりに

がカシであった。

また同一溝であるSD 16b溝では杭材35点の全てが広葉樹であり、その内訳は環孔材2点、散孔材17点、放射孔材6点の構成となっている。

次にSD 16溝西岸で見付かった木製腕輪は、断面が薄いD字形をなす漆塗製品である。幅2.4cm、厚さ9mm、内径9.4cmのサイズであり、少なくとも前期末に位置づけられようが、同じ早良平野内の拾六町ツイジ遺跡(前期後半)出土のものに比較すると細身で内径が大きい。ツイジ遺跡のものは、円形で内径8cm、最大幅4.4cm、最大径10cmを計る。外面に黒漆塗布後、赤漆でシダ状文様を外周外縁に2列に描く。弥生時代木製腕輪は他に奈良県唐古遺跡(第1様式)、東大阪市山賀遺跡(第1様式)などで出土例がある。貝製・青銅製のものに比較してより一般性のある素材である点でこれからの出土例の増加が考えられる。

続く古墳時代では溝遺構1条(SD 10)のみの検出であるが出土土器から7世紀を前後する時期の所産であろう。

本溝も溝北端部に近い下端に沿って施された杭列材の樹種同定を行った。杭材59点は全て広葉樹であり、内訳は環孔材32点、散孔材23点、放射孔材4点の構成となっている。

また出土木器のうち板材の側面に抉りを有するNO 116はクリ、分厚い板材に柄穴を持つW45はカシである。これまでの使用例からW45は農具の可能性が高い。

更に歴史時代と考えられる溝遺構SD 19溝では杭材(丸材・割材・矢板)が乱雑に打込まれた状態で見付かっているが、これらのうち47点の同定を行った結果何れも広葉樹を使用しており、内訳は環孔材36点、散孔材8点、放射孔材3点の構成となっている。

平安時代～中世期では溝遺構・井戸および水田址が検出された。

平安時代にあたる遺構は散発的ながら井戸・小ピット・溝遺構があり、規模的には計るのが困難であるが、井戸址から出土した緑釉陶器などから集落は現在の金屑川左岸一帯に形成されたかなりのまとまりをもったものと思われる。

また中世期(室町末期)ではこの地域は確実に水田として利用されている事が明らかとなった。平安時代以来有力寺社の荘園として変移したこの地域の実態把握のためより多くの水田址の調査が必要となろう。

以上四箇遺跡群第22次調査の成果について略述した。遺物調査にあたっては特に縄文時代遺物について倉敷考古館岡壁忠彦・茂子先生、岡山大学近藤義郎先生に諸々の御教示をいただいた。記して感謝する次第です。

註)

註1.「縄文時代の遺跡と遺物」『和歌山の研究』昭和54年 清文堂

註2.「藤島」興三郎氏ほか 南紀考古同好会 1969年3月

註3.「田村遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第200集』1989年 福岡市教育委員会

Ⅳ おわりに

- 註4. 「四箇遺跡—第23次調査—」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第190集』1989年 福岡市教育委員会
- 註5. 「拾六町ツイジ遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第92集』1983年 福岡市教育委員会
- 註6. 「大和唐古弥生式遺跡の研究」『京都帝国大学文学部考古学研究報告 第16冊』1943年 京都帝国大学
- 註7. 「福岡市拾六町ツイジ遺跡出土の漆塗木製輪軸」『古代文化・第35巻1号』1983年 他

図 版

PLATES



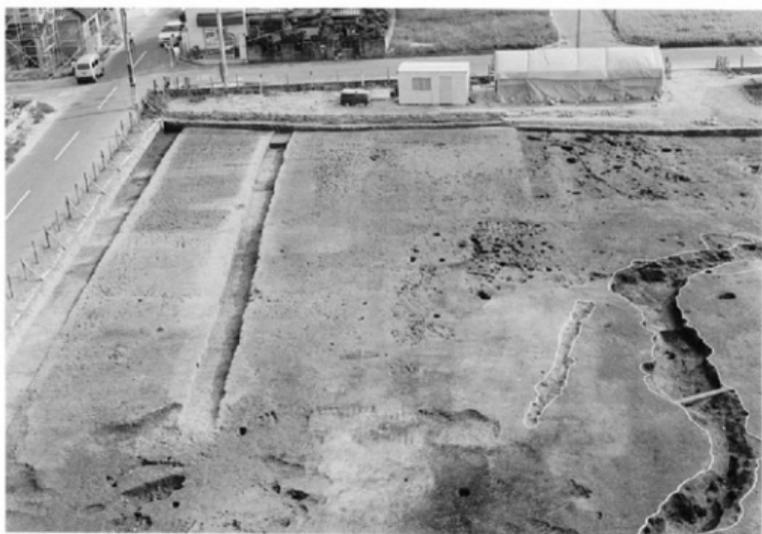
(1) 早良平野奥部を望む (調査区北側より)



(2) 調査区全景 (北東より)



(1) 調査区南側道構検出状況 (北より)



(2) 調査区南東側水田址検出状況 (北より)



(1)



(2)

- (1) 調査区西端部道橋検出状況（北より）
 (2) SD 10溝検出状況（北より）



(1) SD 10溝北半部杭列検出状況（南より）



(2) SD 10溝北半部杭列検出状況（西より）



(3) SD 10溝東岸杭列出土状況（西より）



表土
 床土
 黒色シルト
 暗黄褐色シルト
 灰黄褐色粘質シルト (縞文包含層)
 暗紫灰色粘土
 青灰色粘土
 青灰色礫層 (中位段丘)

(1)



(2)



(3)

- (1) 調査区南壁土層断面 (北より)
 (2) SD 16溝南端部土層断面 (北より)
 (3) SD 16b溝南端部土層断面 (北より)



(1) SD 10溝北壁土層断面（南より）



(2) SD 10溝南壁土層断面（北より）



(3) SD 10溝土層断面（北より）



調査区西端部南壁土層断面（北より）



(1) SD 16溝検出状況全景（北より）



(2) SD 16溝検出状況全景（東より）



(1) SD 16溝検出作業状況 (北より)



(2) SD 16溝西岸矢板検出状況 (東より)

(1) SD 16溝内坑列出土状況 (南 2.0)



(2) SD 16溝内坑列出土状況 (北 2.0)



(1) SD 16溝溝内流木出土状況 (南より)



(2) SD 16溝西岸三叉嶺出土状況 (南より)

(3) SD 19溝付近杭列検出状況 (南より)





(1)

(1) SD 16b 溝検出状況 (南より)



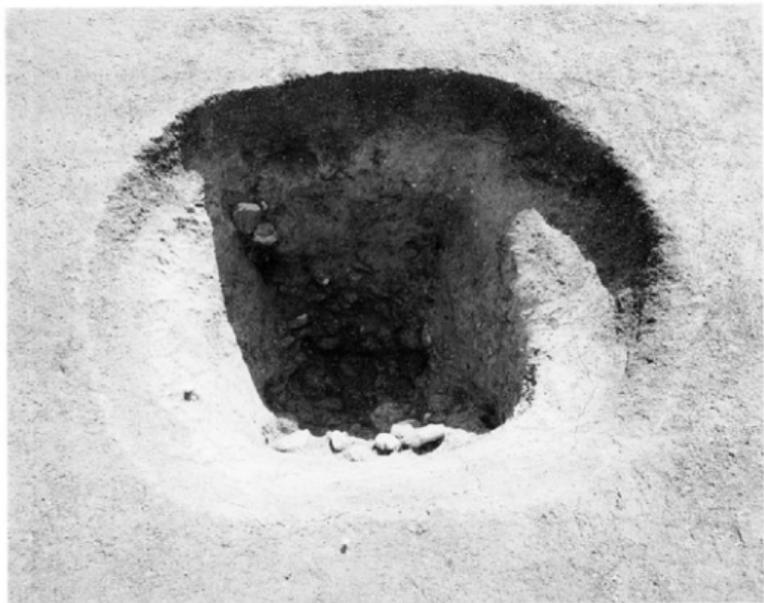
(2)

(2) SD 16b 溝検出状況 (北より)



(3)

(3) SD 16b 溝検出状況 (東より)



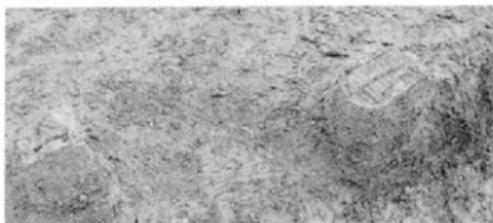
(1) SK 05土壇完掘状況（東より）



(2) SK 05土壇東壁土層断面（東より）



(1) 縄文式土器出土状況 (南より)



(3) 縄文式土器出土状況 (南より)

(2) 縄文式土器出土状況 (南より)



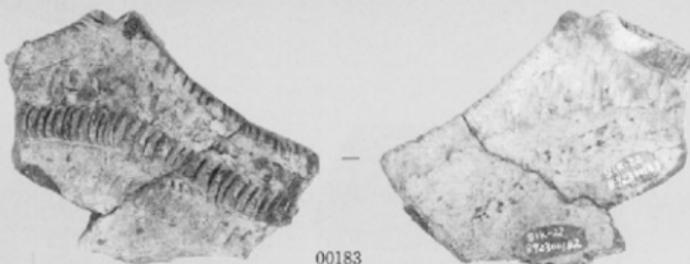
(4) 縄文式土器出土状況 (南より)



(5) 縄文式土器出土状況 (南より)



00146



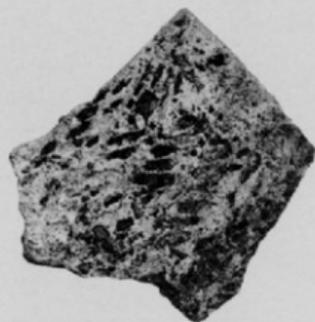
00183



00277



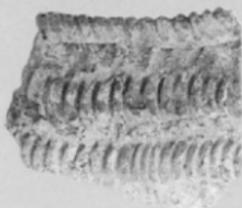
00279



00729



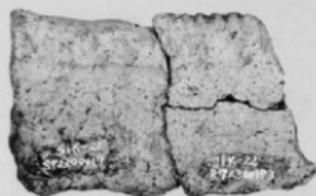
00275



00183



00183



00117



00177



00368



00306



00253



00247



00238



00178



00178



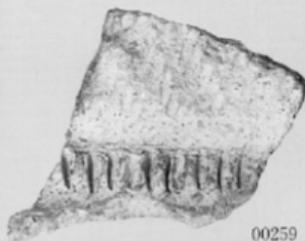
00148



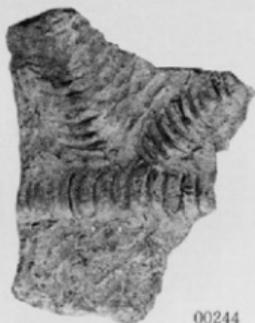
00245



00276



00259



00244



00190



00362



00362



00189



00248



00189



00214



00251



00169



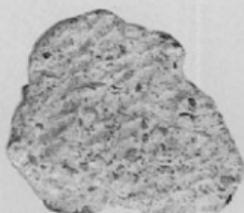
00263



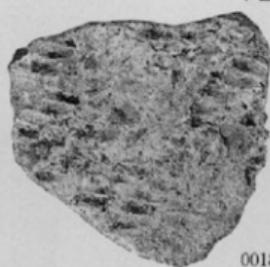
00721



00111



00108



00180



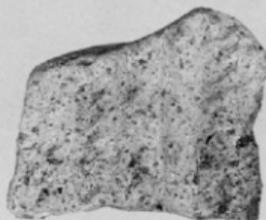
00266



00269



00235



00345



00193



00264



00078



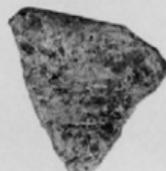
00268



00346



00250



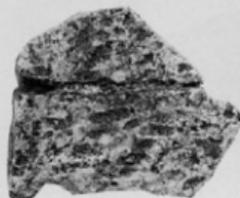
00179



00252



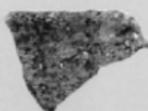
00265



00181



00726



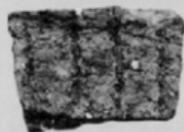
00408



00433



00258



00197



00188



00191



00453



00242



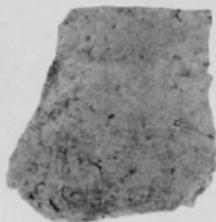
00664



00424



01429



00410



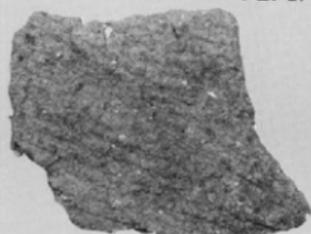
00742



00061



00503



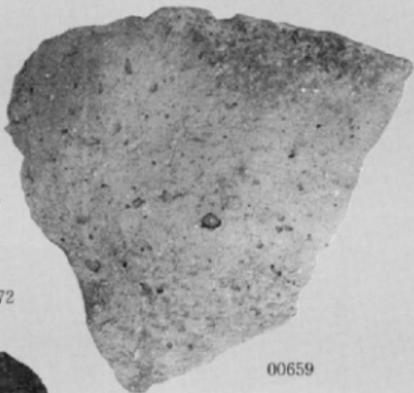
00397



00476



01172



00659



01188



00538



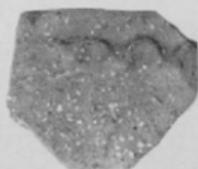
00612



00727



01062



01090



01063



01060



01085



01117



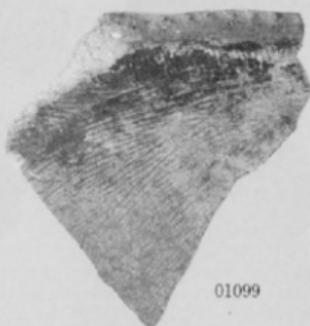
01071



01075



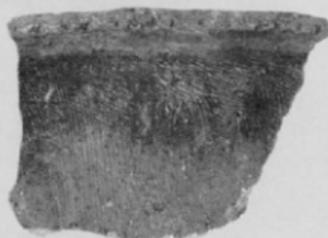
01056



01099



01118



01068



01054



01053



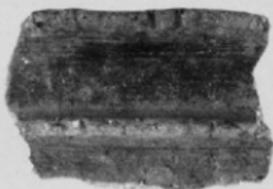
01093



01138



01139



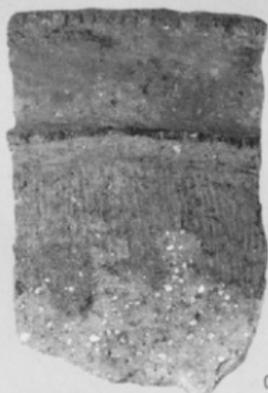
01141



01112



01079



01127



01149



01058



01070



01110



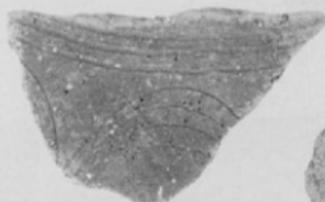
01136



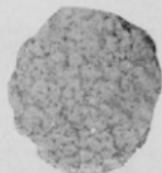
01129



01101



01061



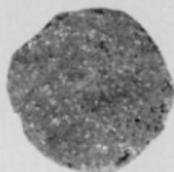
01103



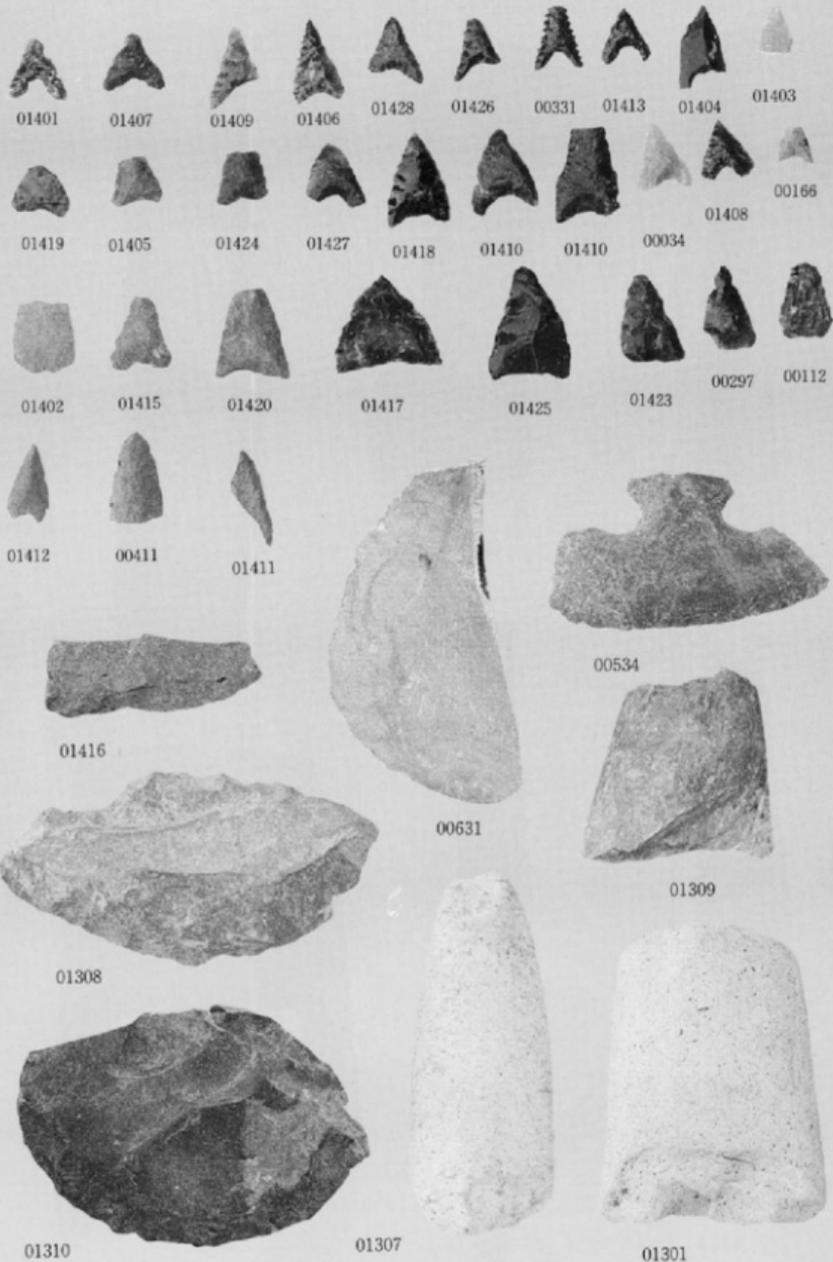
01130



01187



01086



出土各種石器類



116



2001



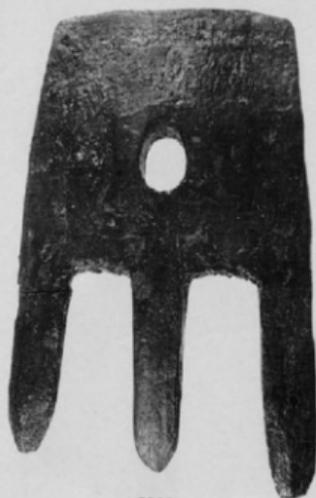
341



1050



962



2000

四箇遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第199集

1989年3月31日

発行：福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷：セントラル印刷株式会社
福岡市中央区大宮1丁目5-13
電話 (092) 522-3181



THE ARCHEOLOGICAL STUDY OF SHIKA SITE

By

The Board of Education of Fukuoka City

No. 199 1989. 3. 31

